

浅川扇状地遺跡群

よし だ まち ひがし
吉田町東遺跡(2)

県単街路事業「北長野通り線」地点

県単道路改築事業「北長野(停)中俣線」地点

2006年3月

長野市教育委員会

序

遺跡や遺物などの土地に埋蔵されている文化財は、郷土の成り立ちや文化を正しく理解する上で欠くことのできない貴重な遺産です。まさに「土地に刻まれた歴史」といわれる所以がここにあります。現在長野市内では700箇所以上の遺跡が周知されていますが、こうした埋蔵文化財は、そのままの状態で地中に保存し、後世に伝えていくことが理想的な在り方です。しかし、現代社会においては、開発事業の影で破壊される運命をたどる埋蔵文化財が生じてしまうことも致し方ない現実となっております。そこで次善の策として発掘調査を行い、記録として後世に伝えていく手段がとられています。



ここに長野市の埋蔵文化財112集として刊行いたします本書は、長野県長野建設事務所が実施する道路改良工事に伴い、平成14年から3ヵ年にわたって実施してまいりました埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。発掘調査は、市街地における道路拡幅工事に伴うものであったため、用地補償等の進捗に合わせて対象地を小区画に分割し、年度毎に断続的に発掘作業をすすめるかたちとなりました。また、歩道や隣接地への進入路など安全確保上の制約から、各区分での調査範囲は必要最小限に留めざるを得なかったものではありますが、予想を上回る密度で貴重な遺構・遺物が出土することとなりました。ここに、調査成果を広く公開するとともに永く保存をはかることを目的とし、本書に一連の記録を所収して公開するものであります。この度の成果は、連続と綴られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助として市民をはじめとする多くの皆様にお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、長野建設事務所各位におかれましては、埋蔵文化財保護に対するの深いご理解にもとつき、発掘調査の実施に多大なご尽力を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。

平成18年3月

長野市教育委員会
教育長 立岩陸秀

例 言

- 1 本書は、県単街路事業「北長野通り線」および県単道路改築事業「北長野（停）中俣線」に伴い、浅川扇状地遺跡群吉田町東遺跡内において実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、長野建設事務所長と長野市長との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、長野市教育委員会（埋蔵文化財センター）が実施した。
- 3 調査地は、長野市吉田3丁目937-1他に位置する。
- 4 発掘調査は、県単街路事業「北長野通り線」を平成14・15年度に、県単道路改築事業「北長野（停）中俣線」を平成15・16年度に実施した。
- 5 遺構図中の座標・標高は、日本水準原点の座標及び平面直角座標系第Ⅷ系座標値（日本測地系2000）に基づく。
- 6 遺構図の縮尺は、基本的に1：80とし、詳細図についてはこの限りではなく適宜縮尺を明示した。
- 7 遺構図の縮尺は基本的に1：80とし、微細図についてはこの限りではなく適宜縮尺を明示した。尚、遺構図中のスクリーントーンは  が焼土面を、 が硬化面を表す。
- 8 遺構の略号は、住居址がS B・土坑がS K・溝址がS D・性格不明遺構がS Xである。
- 9 遺物実測図は、縄文・弥生・土師器を断面白抜き、須恵器を黒塗りとし、弥生土器の赤彩、土師器内黒処理はスクリーントーンにて示した。
- 10 遺構番号および遺物の注記番号には遺跡の略記号を用い、県単街路事業「北長野通り線」分を「AYMH」、県単道路改築事業「北長野（停）中俣線」分を「AYMH-Ⅲ」と表記した。
- 11 出土遺物・遺構図版などの諸記録は、長野市教育委員会（埋蔵文化財センター）において保管している。

目 次

序

例 言

第I章 調査経過

1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	3
3 調査体制	4

第II章 遺跡周辺の環境

1 地理的環境	5
2 考古学的環境	6

第III章 調査概要

第IV章 遺 構

1 弥生時代住居址	23
2 古墳時代住居址	28
3 奈良・平安時代住居址	36
4 建物址土坑 他	50
・遺構一覧表	52

第V章 遺 物

1 土器	55
2 石器	70
3 鉄器	73
4 土製品	74
5 銅銭	74
・遺物一覧表	75

第VI章 結 語

遺物写真

挿 図 目 次

図 1	調査範囲および調査区位置図	1	図 3 4	A B 区 S B 4 実測図	38
図 2	調査地周辺宇境図	2	図 3 5	A B 区 S B 5 実測図	39
図 3	調査地および周辺地図	5	図 3 6	A B 区 S B 6 実測図	39
図 4	調査地周辺の遺跡位置図	7 8	図 3 7	A B 区 S B 7 実測図	40
図 5	調査区位置図	11 12	図 3 8	A B 区 S B 8 実測図	40
図 6	A・B 区遺構分布図	13 14	図 3 9	A B 区 S B 10 実測図	40
図 7	C・G 区遺構分布図	15	図 4 0	C 区 S B 2 実測図	41
図 8	D・E・F 区遺構分布図	16	図 4 1	C 区 S B 3 実測図	41
図 9	H 区遺構分布図	17	図 4 2	D 区 S B 1 実測図	42
図 1 0	I・J 区遺構分布図	18	図 4 3	E 区 S B 1・2 実測図	42
図 1 1	- A・B・C 区遺構分布図	19 20	図 4 4	E 区 S B 3 実測図	42
図 1 2	H 区 S B 3 実測図	23	図 4 5	E 区 S B 4 実測図	43
図 1 3	J 区 S B 3 実測図	24	図 4 6	E 区 S B 5 実測図	43
図 1 4	- B 区 S B 2 実測図	25	図 4 7	F 区 S B 2 実測図	44
図 1 5	E 区 S B 6 実測図	26	図 4 8	F 区 S B 3 実測図	44
図 1 6	E 区 S B 6 実測図	26	図 4 9	F 区 S B 4 実測図	44
図 1 7	- B 区 S B 1 実測図	27	図 5 0	G 区 S B 1 実測図	45
図 1 8	- B 区 S B 3 実測図	27	図 5 1	G 区 S B 2 実測図	46
図 1 9	A B 区 S B 3 実測図	28	図 5 2	G 区 S B 3 実測図	47
図 2 0	C 区 S B 5 実測図	29	図 5 3	H 区 S B 1 実測図	48
図 2 1	C 区 S B 5 カマド実測図	29	図 5 4	H 区 S B 4 実測図	48
図 2 2	C 区 S B 1・4 実測図	30	図 5 5	H 区 S B 5 実測図	48
図 2 3	C 区 S B 1 カマド実測図	31	図 5 6	I 区 S B 1 実測図	49
図 2 4	F 区 S B 1 実測図	31	図 5 7	I 区 S B 2 実測図	49
図 2 5	H 区 S B 2 実測図	32	図 5 8	I 区 S B 3 実測図	49
図 2 6	I 区 S B 4 実測図	33	図 5 9	- C 区 S B 1 実測図	50
図 2 7	I 区 S B 4 カマド実測図	33	図 6 0	H 区 S T 1 実測図	50
図 2 8	I 区 S B 5 実測図	34	図 6 1	A B 区 S X 1 実測図	50
図 2 9	J 区 S B 1 実測図	34	図 6 2	A B 区 S E 1・2 実測図	51
図 3 0	J 区 S B 2 実測図	35	図 6 3	J 区 S K 1 実測図	51
図 3 1	A B 区 S B 1 実測図	36	図 6 4	J 区 S K 5 実測図	51
図 3 2	A B 区 S B 2 実測図	37	図 6 5	縄文時代土器実測図	55
図 3 3	A B 区 S B 2 カマド実測図	37	図 6 6	弥生時代土器実測図	57

図 6 7	弥生時代土器実測図	58
図 6 8	弥生時代土器実測図	59
図 6 9	古墳時代土器実測図	61
図 7 0	古墳時代土器実測図	62
図 7 1	古墳時代土器実測図	63
図 7 2	古墳時代土器実測図	64
図 7 3	古代土器実測図	66
図 7 4	古代土器実測図	67
図 7 5	古代土器実測図	68
図 7 6	古代土器実測図	69
図 7 7	石器実測図	70
図 7 8	石器実測図	71
図 7 9	石器実測図	72
図 8 0	鉄器実測図	73
図 8 1	鉄器実測図	74
図 8 2	土製品実測図	74
図 8 3	銅銭拓影	74

第I章 調査経過

1 調査に至る経過

調査地は吉田3丁目に位置する。この付近はJ R北長野駅・長野電鉄信濃吉田駅と元々交通の便の良い場所である上、近年では市街地再開発事業によって商業、公共施設の面においても充実がなされている場所である。こうした中で、今回の調査起因である吉田小学校交差点部分の道路拡幅工事業は、道幅が狭い上、交通量の多い所であったことから以前より地元からの要請が強かったものである。

吉田小学校前交差点および現状道路の拡幅部分を県単街路事業「北長野通り線」、吉田小学校プール南側から旧校門までの部分を県単道路改善事業「北長野（停）中俣線」として具体化し、長野県長野建設事務所との間で平成13年5月より保護協議を行ってきた。この協議により、北長野通り線は14年度より用地買収済み区間から順次発掘調査を実施することとなった。調査地は過去の調査成果をみまえ試掘の実施は不要とし、平成14年7月25日に長野建設事務所より埋蔵文化財発掘依頼書の提出を受けて、同年9月5日より発掘調査に着手した。15年度は4月23日に「埋蔵文化財発掘依頼書」を受領した後、日程協議をかさね7月30日より発掘調査を行った。

北長野（停）中俣線は調査範囲が明瞭でなかったため、平成15年9月1日にプール南側での試掘調査を行った。その結果に基づき現状道路に接した北西側の範囲に遺構存在の可能性がある旨を回答した。長野建設事務所より11月25日付で「埋蔵文化財調査依頼書」の提出を受け、12月8日より発掘調査を行った。平成年度16は旧校門の撤去後、7月27日より調査を行った。

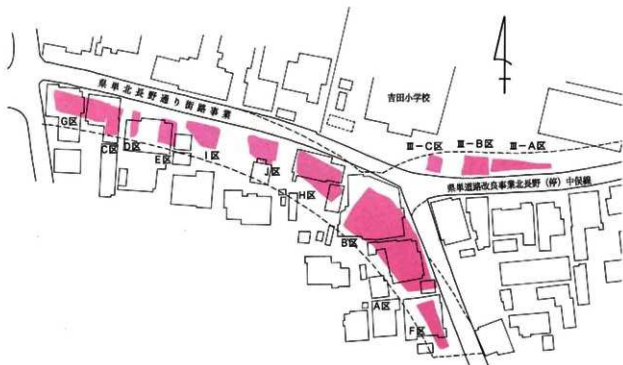
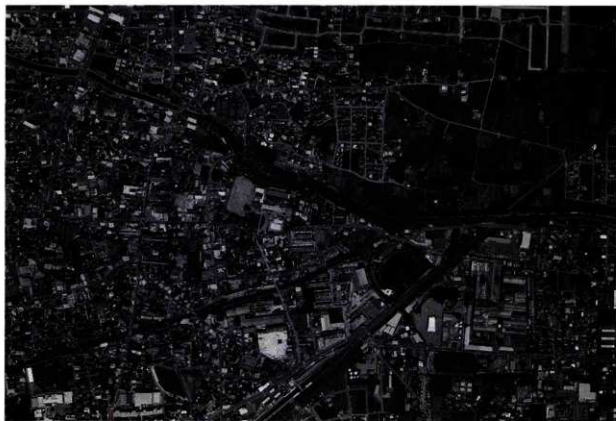


図1 調査範囲および調査区位置図 (S = 1 : 1,200)



調査地周辺航空写真（平成2年6月撮影、㈱ジャステック）

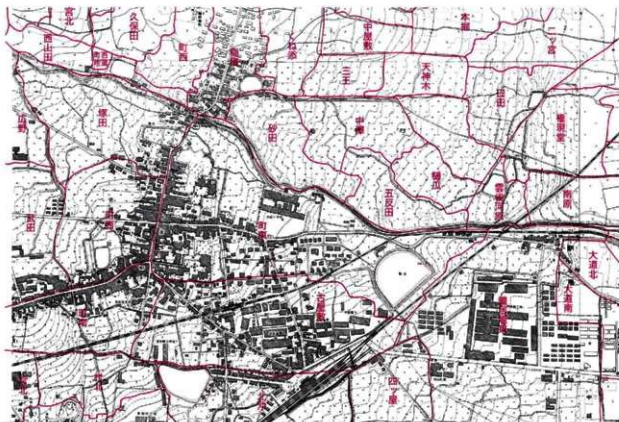


図2 調査地周辺字境図（S=1：10,000）

2 調査の経過

北長野通り線

【平成14年度】

9月5日からA区の表土除去を行い、9日より作業員参加による調査を開始する。9月11日に吉田小学校5・6年生の現場見学を行う（午前・午後各一回）。

10月22日にA区における作業を終了し、10月23日よりB区表土除去を行う。腐土をA区に切り盛りしての作業となる。B区作業終了後、11月下旬より、C・D・E区の表土除去を行う。調査はE区から始め、途中でD区を、12月中旬からC区を平行して行う。翌平成15年1月23日に現場での全ての作業を終了した。作業日数は64日である。

【平成15年度】

7月30日から、F・G区の表土除去を行い、8月5日より作業員参加による調査を開始する。以後、8月下旬にH区、9月中旬にI区、9月下旬にJ区と順次表土除去を行う。

調査は各区とも遺構の検出と掘り上げの目処が付いた時点で次の区へ着手していった為、2つの調査区を同時に行う形となった。F区、G区、H区、I区の順に調査を行い、最後のJ区を10月17日に終え、現場での作業を終了した。作業日数は42日である。

北長野（停）中俣線

【平成15年度】

12月8日より、A区の表土除去を行う。10日より作業員が参加し、17日に現場作業を終了した。作業日数は6日である。

【平成16年度】

7月27日よりB・C区の表土除去を行う。8月2日より作業員参加。B・C区の調査を平行して行う。8月11日に現場での作業を全て終了した。作業日数は9日である。

調査終了後、平成16年度より順次整理作業を、17年度より報告書作成作業を行い、本書の刊行に至る。



B区表土除去



B区作業風景（北から）



H区作業風景（西から）



調査作業員

3 調査体制

埋蔵文化財の保護措置については、史跡等整備事業にかかわる学術調査を長野市教育委員会文化財課が担当し、各種開発行為に伴う緊急調査は埋蔵文化財センターの直轄事業として実施している。

調査主体者	長野市教育委員会教育長	立岩陸秀
総括管理者	埋蔵文化財センター所長	磯野久夫（～H15） 文化財課長 塩沢一郎（H16） 北村真一郎（H17）
統括管理者	局主幹	兼埋蔵文化財センター所長 矢口忠良（H16～）
庶務担当係	係長	山岸恒雄（～H16） 宮沢和雄（H17）
	職員	青木厚子（～H14） 吉村久江（H15～）
	事務員	塚田容子
調査担当係	係長	青木和明（H15～、主任調査員） 千野 浩（H14、主任調査員）
	主査	飯島哲也（～H16） 風間栄一（H16～） 小林和子（H17）
	主事	風間栄一（～H15） 小林和子（～H16） 宿野隆史（H17）
	専門員	西沢真弓（～H14） 小野由美子（～H15、調査員） 堀内健次（～H16） 宮川明美（～H15） 清水竜太 内山 梢（～H14） 山下大輔（H14・15） 遠藤恵実子（H14～、調査員） 長瀬 出（H15～） 山野井智子（H15～） 藤原崇志（H15） 石丸敦史（H16～） 森田利枝（H16～） 小出泰弘（H16～） 宮沢浩司（H16～） 山岸千晃（H16～） 加藤拓也（H17）
発掘作業員	伊藤八重子 上原律江 後藤一雄 塩入洋子 清水昭光 清水 武 角田恵子 田中純子 田村秀之 寺島直利 中島昭二郎 中曾根侖 宮沢周子 宮下美代子 山口勝己	
整理調査員	青木善子 池田寛子 多羅沢美恵子 鳥羽徳子 中殿章子 武藤信子 矢口栄子	
整理作業員	倉島敬子 小泉ひろ美 清水さゆり 関崎文子 富田景子 西尾千枝 三好明子 村松正子	
測量業務委託	株式会社写真測図研究所	
表土掘削・安全管理機材	日精建設株式会社	

発掘調査の実施に際しては、業務委託者である長野県建設事務所関係者各位より埋蔵文化財に対しての深いご理解とご協力を賜った。深甚なる謝意を表するものである。

第Ⅱ章 遺跡周辺の環境

1 地理的環境

浅川扇状地は長野市の北西部に展開する。標高1,917mの飯縄山を水源とする浅川は、大峰山(828.2m)と三登山(923.0m)山系の断層沿いの深い横谷を刻みながら標高410~350mの南から北東に広がる扇状地を形成する。

浅川扇状地は浅川東条を扇頂とし、扇頂部では1,000分の25の勾配があり、浅川が扇頂地面を開折している。扇端は、南が城東町・西和田で梅花川扇頂地に接し、東は金箱・富竹付近で千曲川氾濫原に接している。また、この扇状地内には数多くの遺跡が点在しており、「浅川扇状地遺跡群」として把握されている。

本遺跡のある吉田地区は、長野市街地の北東部、浅川扇状地扇頂部より2.5kmの扇端側に位置し、扇端側での勾配が1,000分の15程度にまで減少することにより浅川は稲田との境にある手力橋以下では天井川となり、下流のメガネ橋ではJ R信越本線と交差する所で高架となっている。標高は350~410m。地形はおおよそ長方形の北西隅が張り出し、若槻地区・榎田橋まで達した形で南東に緩やかに低下している。

尚、現在ではJ R・長野電鉄線を中心に市街地の再開発が行われている地域である。

〈参考文献〉 長野市誌編纂委員会1997 「長野市誌」 第1巻 自然編、第8巻 旧市町村史編



図3 調査地および周辺地図 (S=1:20,000)

2 考古学的環境

浅川扇状地遺跡群の内、主に発掘調査歴（集落址）のある遺跡について示した（図4）。この中では、標高360～410mの間に扇頂から放射状に各遺跡が広がっているのが見て取れ、起伏の少ない谷地形が使われていたことがみられる。

浅川扇状地遺跡群の中で、明確な生活址がみられる様になるのは縄文時代からである。浅川端遺跡（1）において前期前葉の住居址が、後期には吉田古屋敷遺跡（13）、吉田四ッ屋遺跡（17）で敷石住居が確認されている。以上、遺構は少なく、吉田古屋敷遺跡などの周辺の遺跡においては当該期の土器片の出土があるが、今のところ当該期の遺構の存在と範囲が推定されるのみである。

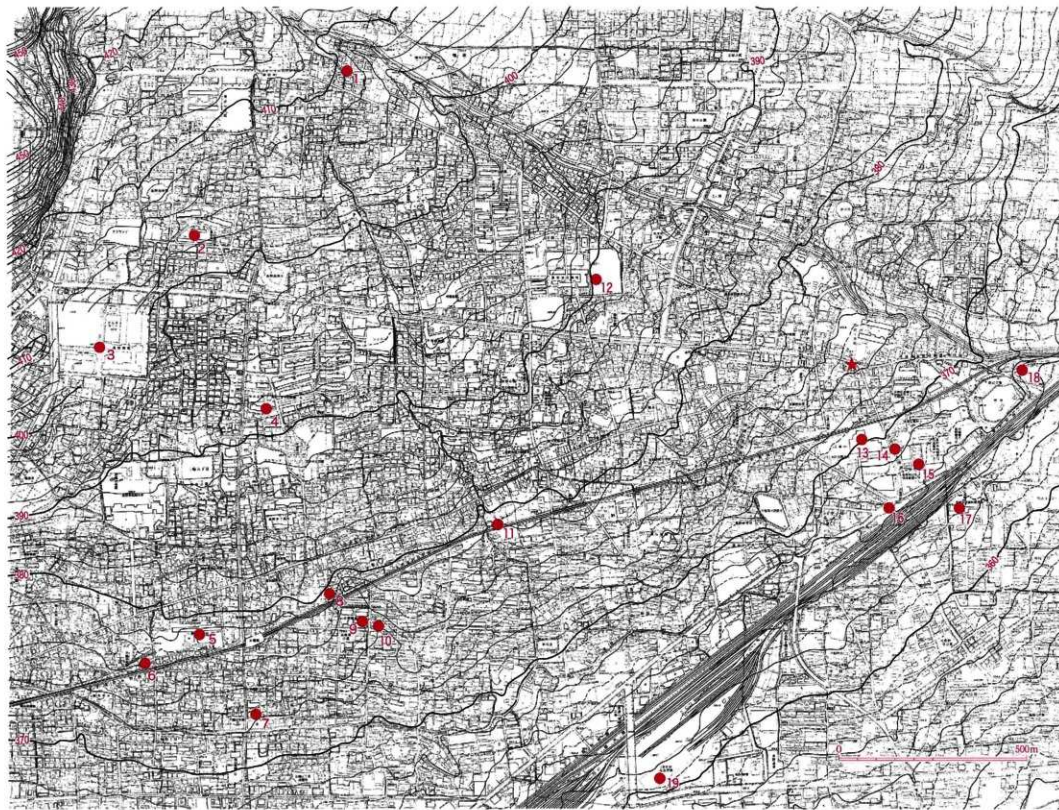
弥生時代では、中・後期を中心に遺跡がみられ、中でも吉田高校グラウンド遺跡（12）は、後期初頭、吉田式土器の標識遺跡であり、30軒あまり検出された住居址の内、単一集落の確認がされている。また、後期を主体に中期からの住居を44軒検出している本村東沖遺跡（3）では、遺構の密度の高さに加えて近接する下字木遺跡（4）との関連性が窺われており、広い範囲に渡っての集落の様子がみられる。このように当地においては弥生時代から集落の造営が本格化し始める。

その他には、浅川端遺跡・三輪遺跡（9・5）、中でも吉田四ッ屋遺跡・吉田古屋敷遺跡・新幹線地点では、中期から後期にかけての住居址が各遺跡内でまばらに存在しており、吉田高校グラウンド遺跡などの様な大規模なもののみられない。ただ、小規模ではあるが遺跡が隣接した位置にあることを考慮すると、当該期の住居域としての範囲が予測されるものである。

古墳時代の遺構は、多くの遺跡において確認されている。尚、前期は主に三輪遺跡（10）・吉田古屋敷遺跡・吉田四ッ屋遺跡・辰巳池遺跡（18）にみられる。いずれも遺構数は少ないが、吉田四ッ屋敷遺跡・吉田古屋敷遺跡（15）では、周溝を伴う墳丘墓が確認されている。現段階では墳丘墓に伴うであろう集落の把握はないが、この辺りを含めたある程度の規模を持つ集落の存在が窺われるところである。一方、中期から特に後期を主体とした住居址を持つ遺跡は多くなり、中でも浅川端遺跡・本村東沖遺跡・下字木遺跡・三輪遺跡・桐原宮西遺跡（11）・吉田古屋敷遺跡は、古墳後期を主体としている。このことから、当地において古墳時代後期は、弥生時代後期以降時間を置いて、次に広い範囲に渡り集落が形成された時期と考えられる。

奈良・平安時代は、主に古墳後期の集落が形成されている遺跡において引き続き集落が営まれている。ただし、浅川端遺跡では平安時代の住居址はみられるものの数が少なく、この時期での集落の造営がなされなかったとされている。また、本村東沖遺跡でも似た状態にある。三輪遺跡（5～10）や桐原宮西遺跡では奈良時代から平安時代にかけての住居址が、また、それよりも東では吉田町東遺跡を中心に吉田四ッ屋遺跡までにこの時期の住居址がみられる。その中で、特に遺跡内で住居址が集中してみられる遺跡（桐原宮西遺跡・吉田町東遺跡）もあり、これらの遺跡が中心である可能性も考えつつ、この辺りでの集落が奈良・平安時代には主に標高360～380mの範囲に広く展開したことがうかがわれる。また、この傾向は古墳時代後期からみられ始めたものであると考えられる。

集落の展開する位置の変化には、生活や集落の規模などの変化によることが考えられるが、浅川遺跡群においては、遺跡の中に河川の影響がみられる地点があることから、浅川の流路の変化が大きく影響していたものと思われる。



- 1、浅川端遺跡群 2、本村東沖遺跡 3、本村東沖遺跡 4、下宇木遺跡 5、三輪遺跡(1) 6、三輪遺跡(6) 7、三輪遺跡(5) 8、三輪遺跡(2) 9、三輪遺跡(3) 10、三輪遺跡(4) 11、桐原宮西遺跡 12、吉田高校グランド遺跡 13、吉田古屋敷遺跡(1) 14、吉田古屋敷遺跡(2) 15、吉田古屋敷遺跡 16、新幹線地点 17、吉田四ッ屋遺跡 18、辰巴池遺跡 19、北長野貨物駅遺跡 屋印、吉田町東遺跡 (カッコ番号は報告書番号)

図4 調査地周辺の遺跡位置図(等高線:大正15年測量、昭和27年修正図を一部改変)(S=1:10,000)

第三章 調査概要

北長野通り線は平成14・15年度に道路拡張部分の調査を行った。現状の道路と住宅との間に調査区があることから、対象面積約2,000㎡の内、出入口の確保、ガス・水道などの埋設物の状況に応じて調査区を分ける事となり、全部でA～Jの10区を設定した。14年度にA～E区、15年度にF～J区の調査を行い、実質調査面積は約1,000㎡となった。

北長野（停）中保線は平成15・16年度に調査を行った。15年度に吉田小学校プール南50㎡（Ⅲ-A区）を行い、16年度に旧正門にあたる位置を上下水道及び排水施設の埋設状況から2区（Ⅲ-B・C区）に分けた。保護対象面積190㎡の内、実質調査面積は120㎡である。

A・B区

A区とB区は廃土の切り替えしによって調査を行った為、区の名称を変えたが、本来1つの区であることから遺構番号をA・B区通しで付けた。

調査面積はA区が200㎡、B区は248㎡であるが、B区東側は主に河川の影響によるレキ層と後世の攪乱を受けていたため、遺構は西側の半分ほどからみられるのみであった。遺構面は、現地表下約90～60cm、西側につれて高くなる。東端ではレキを多く含んでいたものの、住居址の検出よりも西側ではほとんどレキを含まない黄褐色土である。

遺構は、住居址9軒、井戸址2基、溝6条、性格不明遺構1基、土坑は土器が出土したもののみで42基、他ピットを検出した。住居址は調査区内に密に存在し、特にA区では古墳時代後期から平安時代までのものが重複している。カマドは、残りが良好なものが4軒、他3軒でも位置などが把握できる程の検出ができた。井戸址は共に平安時代、素堀りのもので1m近く掘り下げた時点で湧水が見られ、この辺りでの地下水が浅いことが窺える。調査区中には多くの土坑・ピットを検出したが、土器の出土は僅かであり遺構の用途を掴むことはできなかった。時期は住居址との切り合いなどから、奈良・平安時代のものが大半である。

C区

調査面積は41㎡である。現地表面からの深さ約50㎡の所で、住居址5軒、土坑2基を検出した。比較的狭い調査区内のほとんどが住居の床面となる程、古墳時代後期から平安時代にかけての住居址が重複している。

平安時代住居（SB2、遺構の一部がG区に掛かっている）の中央に近代の井戸が掘り込まれている他は遺構の残りは良好である。SB1・SB3についてはカマドを含め、住居の様子をほぼ確認することができた。SB5については、壁面でカマドの一部を確認したことから、調査区の拡張を手掘りで行ったものでカマド部分のみの検出となった。

D区

調査面積は20㎡である。ごく狭い範囲の上東西方向に既存の水道管を残した。住居址1軒、土坑2基とピットがあるが、全てごく一部を検出したのみである。

E区

調査面積は45㎡である。遺構検出面上に厚さ約20cmの包含層があり、この中から約10kgと多くの土器が出土した。住居址6軒、溝1条、土坑1基を検出。住居址は奈良・平安時代が5軒と弥生時代後期（SB6）が1軒。SB6ではSB5と重複しているものの土器埋納戸を検出した。SB2で全体の把握ができた他は調査区外に遺構が伸びており、遺構の一部を確認したにすぎない。

F区

調査面積は67㎡である。現地表面からの深さは約80cmを測る。住居址4軒、溝1条、土坑は土器の出土があったもので8基を検出した。住居址は古墳時代後期が1軒と平安時代のもので、SB4（平安）は多くの土坑と重複しているがカマドと共に遺構の残りは良い。他も遺構の残りは良いが、ほとんどが調査区外に伸びている。

G区

調査面積は113㎡である。住居址3軒、溝1条、土坑2基、他ピットを検出した。住居址は平安・奈良時代のもので、特にSB3（奈良）は1辺が7.2mと大型のものである。SB2ではカマドの破壊と、その後カマド上に土器や石が投棄された形跡が認められた。調査区東端にはC区SB2の一部を検出している。尚、調査区西側の遺構検出面は特にレキを多く含んでおり、河川の影響がみられる。

H区

調査面積は113㎡である。住居址5軒、建物址1棟、他ピットを検出。住居址は弥生時代中期（SB3）、古墳時代後期（SB2）、平安時代のものがある。弥生と平安（SB1）は重複しているが検出状況は良く、床面はほぼ同じ高さであった。SB2は中央を掘乱によって切られ、カマドは半分程の検出となったが、細長い河原石の上に高坏の脚部を被せた支脚など、カマドの形態を把握することができる。建物址は調査区のほぼ中央に位置し、2×1間の規模である。調査区東側ではレキを多く含む箇所があり、河川の影響がみられる。

I区

調査面積は60㎡である。住居址5軒、土坑1基を検出した。調査区南側では古墳・平安時代の住居址が重複関係にある（SB2～5）。その中でSB4では遺構のほぼ全体を検出した。カマドも完全に残っており、住居中央に土器と石が投げ込まれた様子がみられる。SB5（古墳後期）のカマドはSB2（奈良）の床下からの検出である。SB4の床面には弥生後期の土器片が混じる。

J区

調査面積は63㎡である。住居址3軒、土坑5基を検出。住居址は弥生時代中期（SB3）と古墳時代後期のもので、調査区のほぼ中央にある為、検出の状況は良い。SB1とSB2は重複しているがカマドの残りは良く、周辺に土器や石が投げ込まれた形跡が認められる。SB3は大半をSB2によって切られているが、床面からは投げ込まれたと思われる土器が多く出土した。土坑は平安時代のもので多く、なかでも住居の上から掘り込まれたSK5号土坑では坏が多く出土した。

Ⅲ-A区

調査面積は50㎡である。全体的にレキが見られる。特に調査区西側に多く、遺構は東側にあるのみであった。東端にⅢ-B区のSB3の一部がかかり、一定の土器の出土が見られた。その他は土坑は浅く土器の出土量も少ない。

Ⅲ-B区

調査面積は46㎡である。住居址3軒、溝1条、他土坑を検出。住居址は弥生時代中期・後期のもので、調査区内に密に存在している。SB1は検出面からの深さがほとんどなく床面となった。SB2では床面で土器と扁平片刃石斧が検出され、SB1を含め土器の出土量は多い。SB3はA区からの伸張であるが、A区に比べ床面の状態が良い。A区側は河川などの影響を受けたものと考えられる。

Ⅲ-C区

調査面積22㎡。住居址1軒、溝2条、他ピットを検出。全体的に遺構の状態は良好であるが、調査区が狭い事から住居もごく一部の検出となる。土器は破片のみであった。

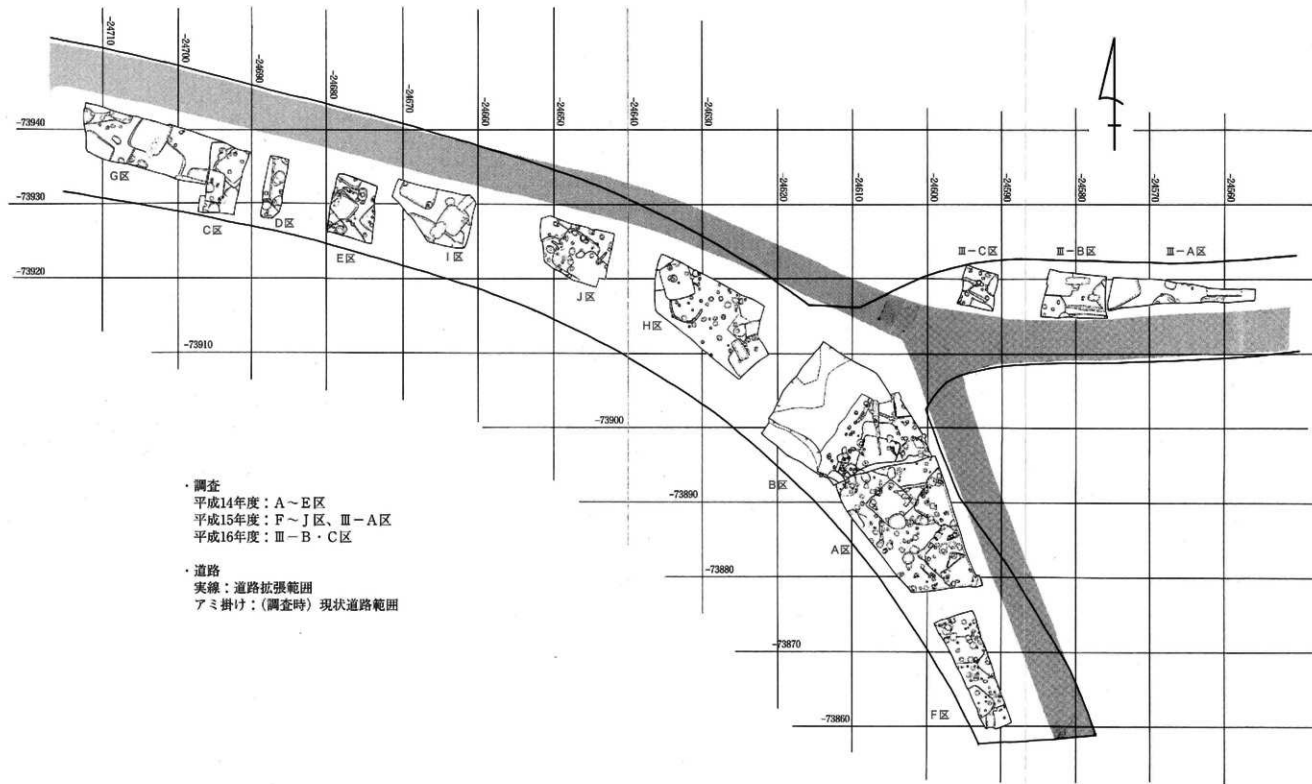


图5 調査区位置图 (S = 1 : 500)

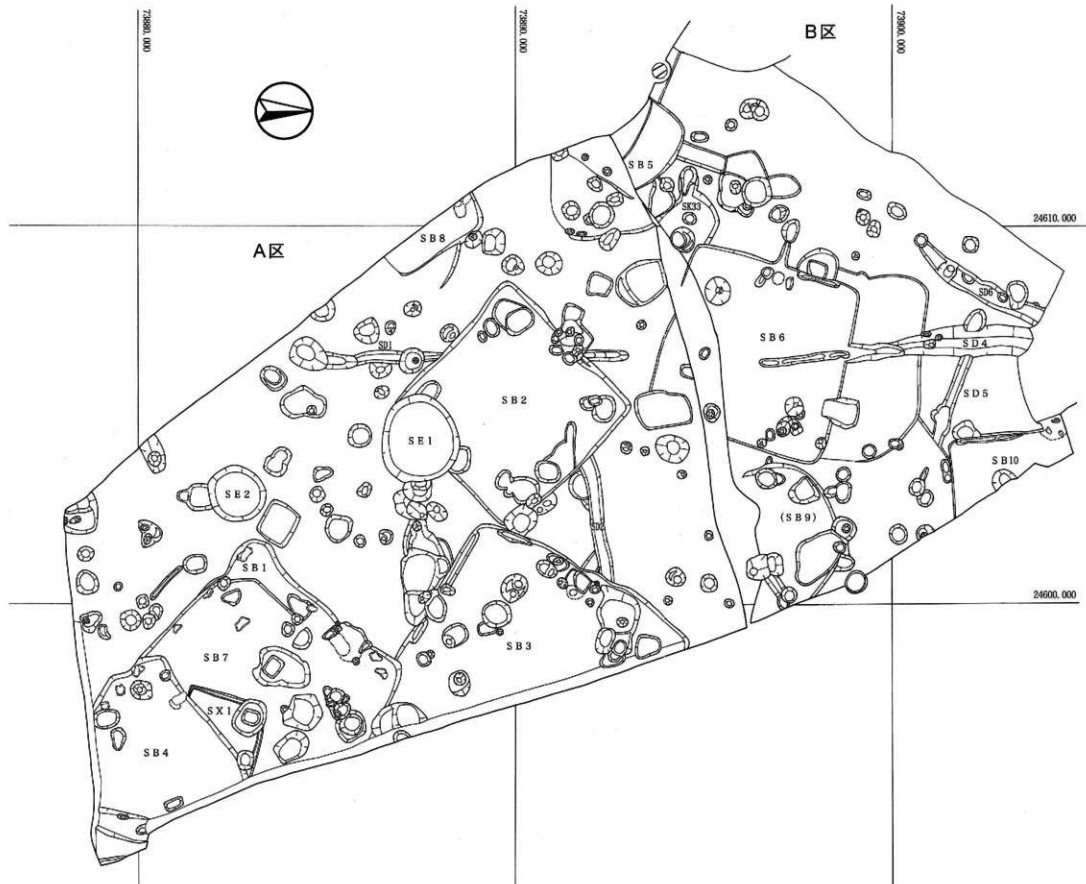


图6 A·B区遗址分布图 (S=1:100)

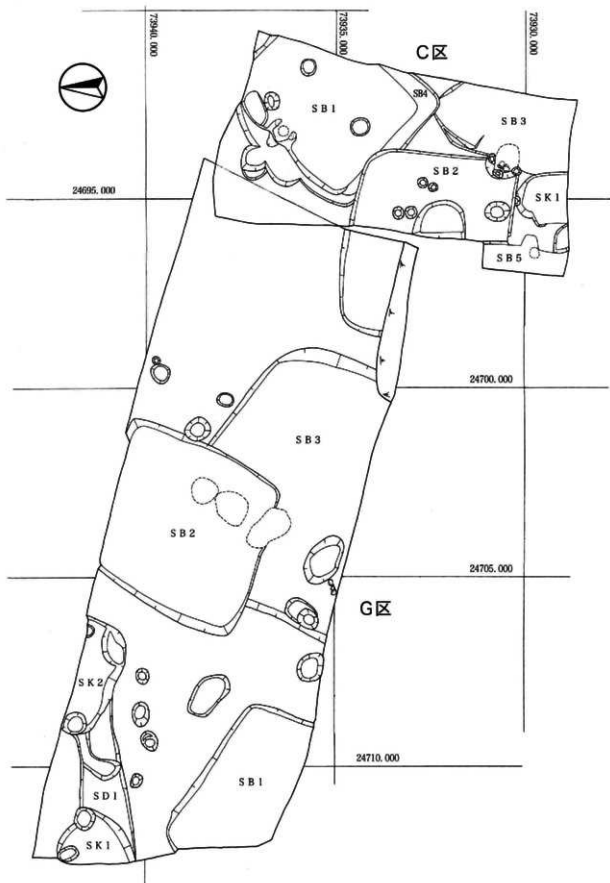


图7 C·G区遗址分布图 (S=1:100)

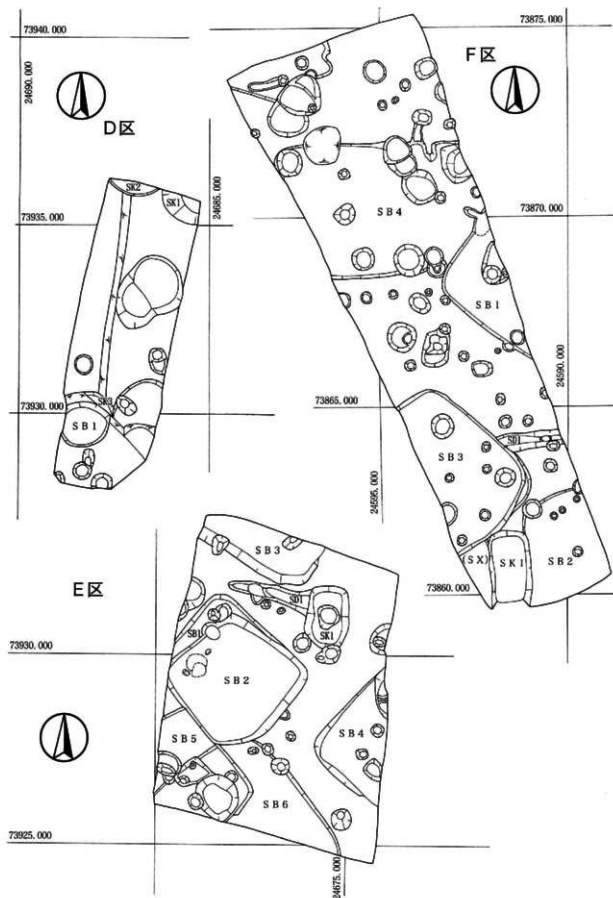


图8 D·E·F区遺構分布図 (S=1:100)

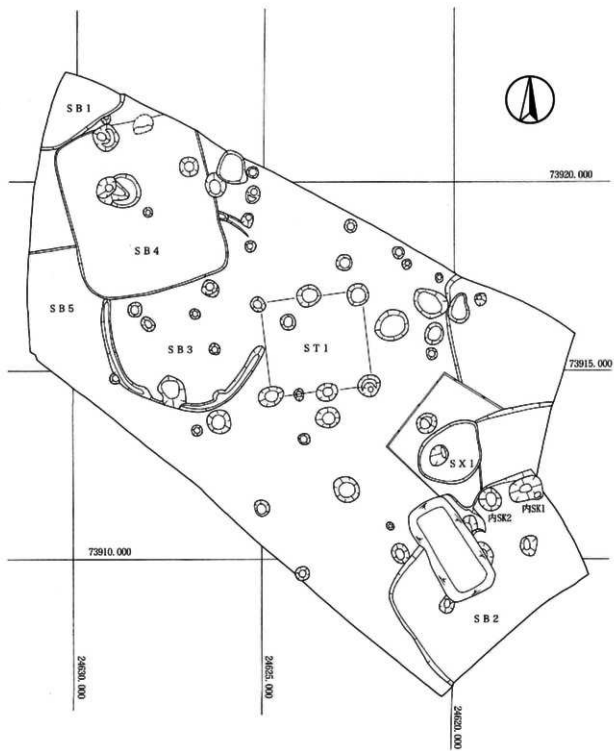


图9 H区遗构分布图 (S=1:100)

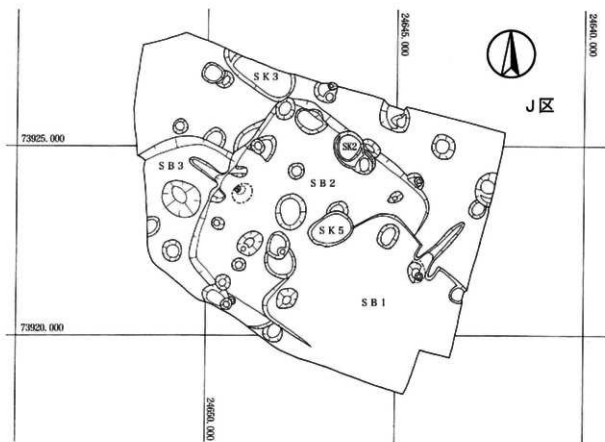
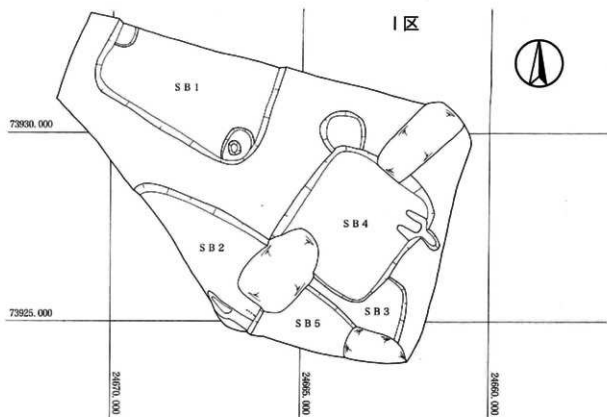


图10 I·J区遗物分布图 (S=1:100)

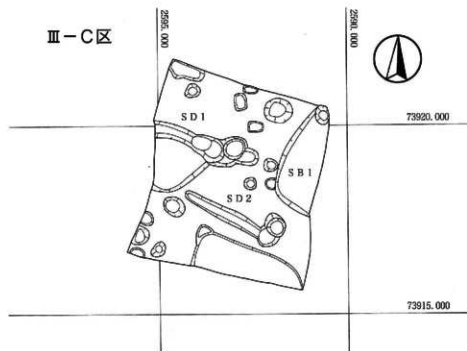
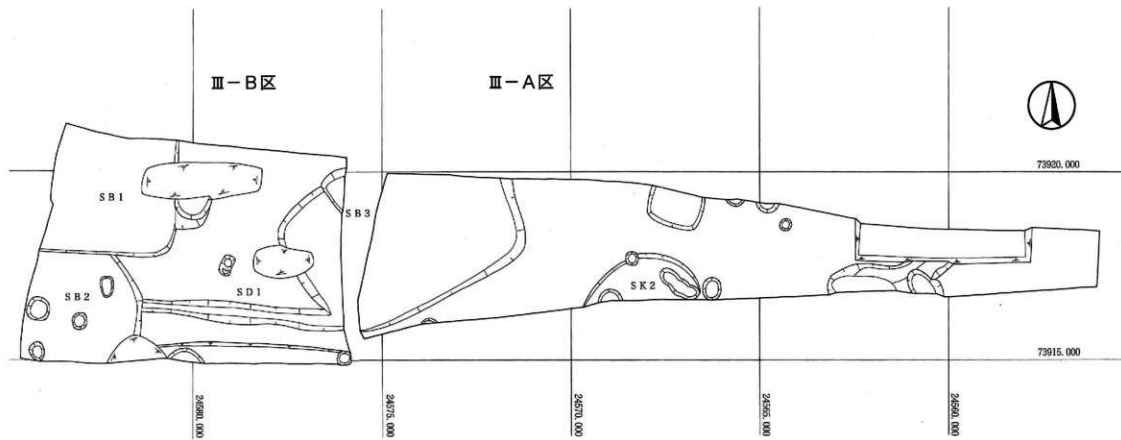


图11 III-A·B·C区遗構分布图 (S=1:100)



A区全景 (南から)



A区全景 (北から)



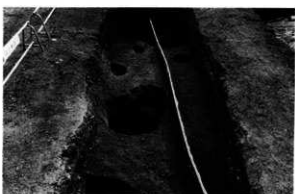
B区全景 (南から)



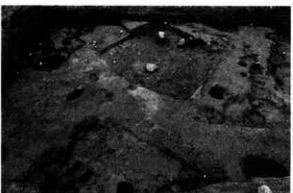
B区全景 (南西から)



C区全景 (東から)



D区全景 (北から)



E区全景 (東から)



F区全景 (北から)



G区全景 (北西から)



H区全景 (北から)



I区全景 (北東から)



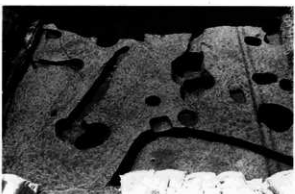
J区全景 (西から)



III-A区全景 (東から)



III-B区全景 (西から)



III-C区全景 (東から)



III-B・C区 (西から)

第IV章 遺 構

調査では、弥生時代中・後期、古墳時代後期、奈良・平安時代の遺構を確認し、住居址45軒、井戸址2基、建物址1棟、溝10条、土坑は土器の出土があったもので70基以上、性格不明遺構2基を検出した。この内、住居址・井戸址・建物址の全てと、土坑については特記されるものについての図版・写真を掲載した。住居址は調査区外、または切り合いによって一部のみの検出となったものについては本文中での遺構説明を省いた。また、文章説明のあるものについても、遺構の時期や形態・規模などといった基本的な情報を省き、詳細については表1「遺構観察表」にまとめた。

住居址遺構図中で、床面からの出土であり、遺物実測図のあるものについて図中に実測図と共に出土地点を示した。

1 弥生時代住居址

H区-SB3

床面は堅緻な貼床が認められる。南側中央には入口施設と考えられる不整楕円形の土坑がある。周溝は全体に検出面からの掘り込みが浅いため全体の輪郭を検出するには至らなかったが、ほぼ全周するものと思われる。住居址の中央奥よりに炭化物のみられる窪みがみられ、地床炉としての可能性も考えられる。土器は形の残るものは、壺が胴部下半分を、底部を下にした状態で置かれているのみである。

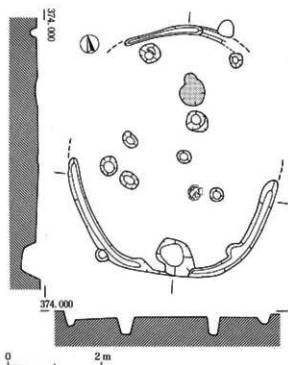


図12 H区SB3実測図 (S=1:80)



H区SB3 (南から)



H区SB3土器出土状況

J区-SB3

床面は明確な貼り床が一部に認められ、全体に堅く締まっている。床面からの掘り込みは深い所で37cm程ある。床面からは、ほぼ原形を残す土器が多く出土しており、出土状態から住居の廃絶時に遺棄されたものと思われる。本住居址出土土器のほとんどが床面からのものであることをふまえると、遺構の埋没も一度に行われたことが考えられる。

また、遺構の半分程はSB2によって切られているが、土器の出土状況から、かなり多くの土器が投げ込まれたことが予想される。

支柱穴は2ヶ所（P-1、P-3）確認し、いずれも2段掘りのものである。遺構図中、東側に破線で示した住居範囲は、一部がSB2の床面において確認できたものである。

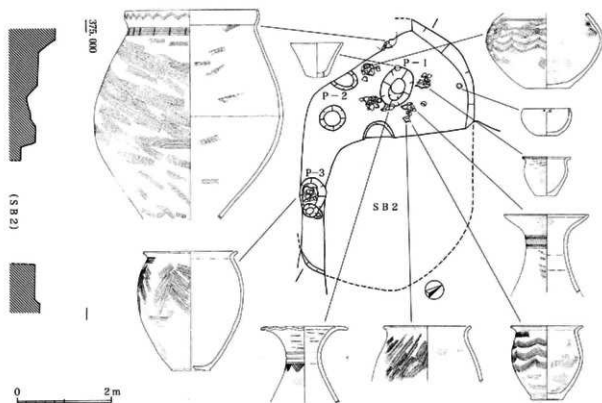


図13 J区SB3実測図（S=1:80）（土器：S=1:8）



J区SB3土器出土状況（北から）



J区SB3（北から）

Ⅲ-B区SB2

検出面からの掘り込みは16cm。切り合うSB1よりも、床面は低い位置にある。床面はややレキが露出するが、比較的締まっている。

床面には、ほぼ原形のままつぶれた状態の土器、扁平片刃石斧が出土した。この内住居の中央南よりに焼土の上に壺が1個体分潰れた状態でのっているものがある。炉施設とも考えられるが、焼土が全体に薄かった為、断定は難しい。

出土土器は床面からのものを中心に量は多い。しかし、検出から覆土中にかけての土器の一部は、重複しているSB1（弥生後期）との境が検出の始めの段階では明確でなかった為、2軒分が混在している。



Ⅲ-B区SB2（西から）

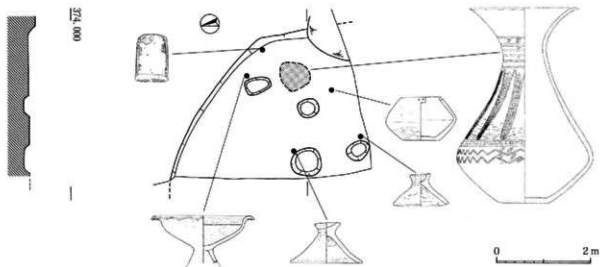
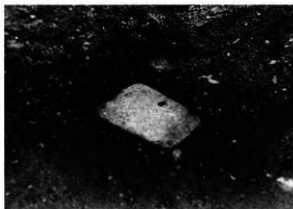


図14 Ⅲ-B区SB2実測図 (S=1:80) (土器:S=1:8、石器:S=1:6)



Ⅲ-B区SB2土器出土状況（北から）



Ⅲ-B区SB2石器出土状況

E区-SB6

検出面からの掘り込みは深い所で15cm程あるが、他の住居と重複していることから本来の壁面の明確な検出はない。床面の検出は明確であったが、堅緻ではない。

調査区北西側、住居中央壁よりの位置には、壺の下半分を2個重ねた土器埋納炉がある。壺は両方共、一部分のみを大きく残し、その部分が向き合う形で埋められていたことが土器の復元（図66-4・5）から窺える。検出時の状況から、土器は埋められた状態のままであると思われる。

炉の脇には上部の径が1m弱、底部が70cmの2段の掘り込まれた不整形の土坑があるが、遺物はほとんどなく性格は不明である。

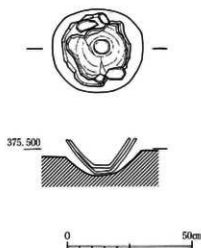


図16 E区SB6実測図 (S=1:15)

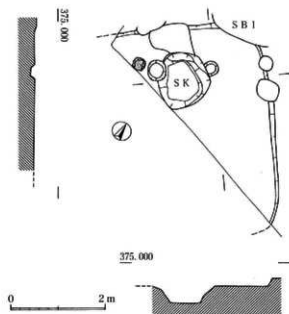
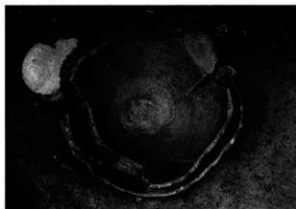


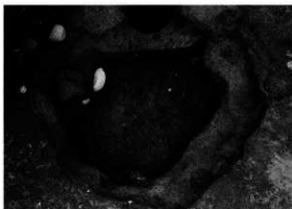
図15 E区SB6実測図 (S=1:80)



E区SB6 (東から)



E区SB6土器埋納炉



E区SB6住居内土境

ⅢB区-SB1

検出面からの掘り込みはごく浅い。床面は一部貼床のみられる堅緻なものである。土器は破片がほとんどであるが、検出範囲からみると出土量は多目である。

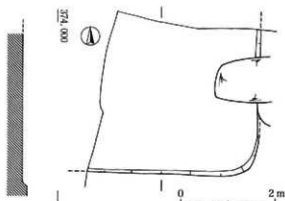


図17 Ⅲ-B区SB1実測図 (S=1:80)



Ⅲ-B区SB1 (西から)

ⅢB-SB3

A区とB区にかけての検出となった。掘り込みは20cmを測り、残存状態は良い。床面はB区でややレキを含んではいたものの明瞭であったのに対して、A区ではレキを多く含み、非常に軟弱な状態で検出となった。

遺物の出土は多いものの、破片が多く、完形のは小型台付甕(図68-27)が床付近から出土したにすぎない。

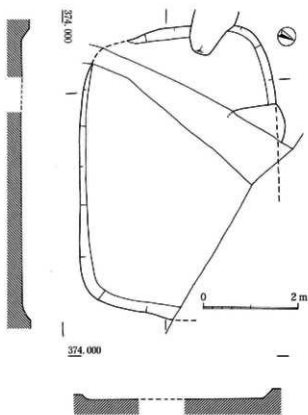


図18 Ⅲ-B区SB3実測図 (S=1:80)



Ⅲ-B区SB3 ⅢA区検出側(南から)



Ⅲ-B区SB3 (東から)

2 古墳時代住居址

A・B区-SB3

本遺跡の中で最も大型の住居址である。検出面からの掘り込みは20cmを測り、床面は比較的堅緻である。壁際には部分的に周溝状掘り込みがみられる。主柱穴は2個（P-3、P-4）が確認された。

カマドは北壁中央に構築され、煙道が一部と壁際を浅く掘り窪めた火床面、火床には硬化面と焼土が残り、その左右には袖石の抜き取り痕が残る状態であった。なお、カマド右側にはやや大きめの不整形を呈する土坑があり、特に目立った遺物はなかったものの、貯蔵穴の可能性が考えられる。

ほか、遺物等が意図的に投げ込まれるなどの住居廃棄に伴うものは見られなかったが、全体の半分程の調査であったことに対して覆土中の土器は多いといえる。

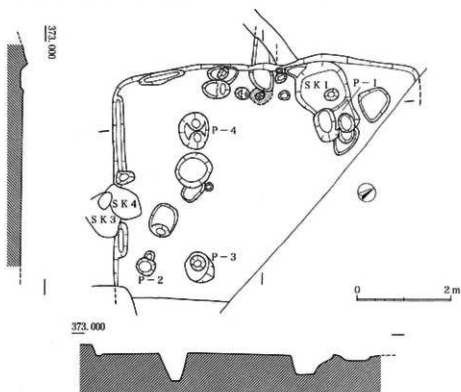


図19 AB区SB3実測図 (S=1:80)



AB区SB3 (東から)



AB区SB3カマド

C区-SB5

調査区壁面から窺が見えたため、調査区を一部拡張しカマド部を検出した。住居は、全体にレキと水分を多く含んでおり、南側で切り合う土壁と共にはっきりと判別するには至らなかった。

カマドは東側に長胴甕と石材がほぼ一直線に並び、石材の西側にもう1つ石材が並ぶ。長胴甕の器高は29cm、石材もほぼ同じ位の大きさがある。甕と石材の中央には焼土を多く含む土が甕の床面から15cm程の高さまであり、その上に割れた甕が平らに置かれている。これらを外すと床面に30cm程の硬化面がある。住居の一部確認できた壁面と合わせると、カマドは西側が正面、煙道はなく住居壁面より外に出た所謂突出カマドである。



C区SB5 (西から)

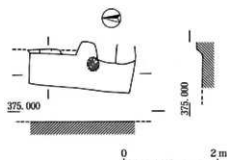


図20 C区SB5実測図 (S = 1 : 80)



C区SB5カマド

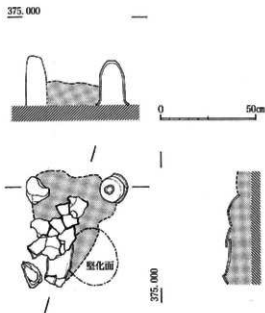


図21 C区SB5カマド実測図 (S = 1 : 20)



C区SB5カマド (東から)

C区-SB1・4

SB1がSB4の上に重複している。明確な差は見られず、西側の壁面と、調査区の壁面によって2軒分を確認した。立て替えの可能性が考えられる。

床面はレキの露頭が目立ち、大変軟弱な状態である。なお、SB1の中央に自然石が3列に並べた状態で検出された。床面に接していることから住居廃棄に伴うものと考えられる。カマド(図23)の残りは良く、両袖石や内部の土器・支脚石が残っていた。カマド右側にある貯蔵穴と思われるピットからも原形が分かる程の土器があり、使用時のままの状態に住居が廃棄されたことが窺われる。

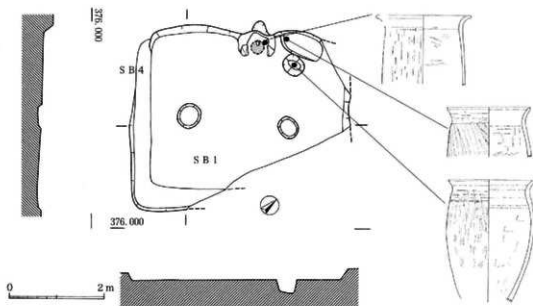
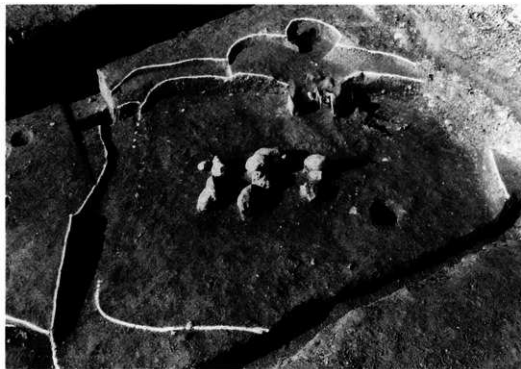


図22 C区SB1・4実測図(S=1:80)(土器:S=1:8)



C区SB1・4(南東から)

SB1カマド

左右の袖石と袖部の構築材を残している。支脚石は細長い河原石であり、堯（図69-12）が内面を上に向けた状態で袖部と支脚石の間から出土した。カマド内部は明確な焼土面がみられる。

カマドの全面からは、床面よりは高い位置であるが、杯などが出土している。

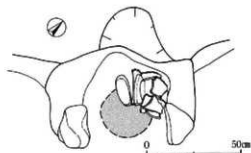


図23 C区SB1カマド実測図 (S=1:20)



C区SB1カマド



C区SB1カマド (土器取り外し後)

F区-SB1

床面は堅く締まっている。カマドは袖部分は見られないが、堅く明瞭な焼土面と、煙道の一部を残している。カマド全面に2段掘りの土坑が掘られている。

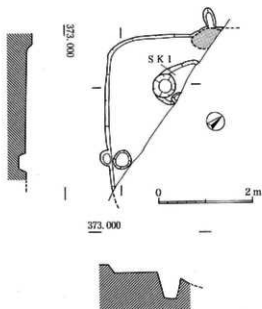


図24 F区SB1実測図 (S=1:80)



F区SB1 (北西から)



F区SB1カマド

H区-SB2

検出面からの掘り込みは最大で25cmを測る。床面ははっきりとしているものの、レキを多く含んでいる。

住居中央は攪乱によって切られ、カマドは半截した形となっているが、支脚などが良好な状態で残っていた。カマド右側の土坑(SK-1)には、杯と壺(図70-18・19)とが入っており、埋納土坑としての性格が考えられる。



H区SB2カマド



H区SB2カマド(土器取り外し後)



H区SB2カマド断面

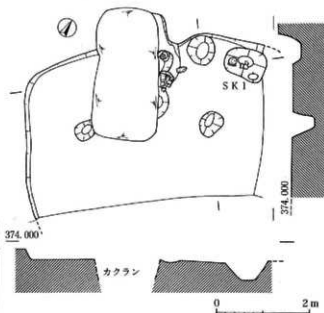


図25 H区SB2実測図(S=1:80)

カマドは、右側の袖石と支脚、全面に堿が2個体分、煙道の様子もみられる。支脚は石の上に高杯の脚部を被せたもので、断面からは埋めた様子が見られる。



H区SB2土坑内土器(SK1)



H区SB2(北西から)

I区-SB4

土坑と攪乱により一部が切破壊されるが、遺構の全体を検出した。床面はやや堅い。床面直上には土器と石が住居のほぼ中心から固まった状態で確認された。

カマドは南壁の隅に造られており、原型を留めていた。粘土構築の袖と袖石が残り、袖部の高架石は前面に落ちていた。カマド中央の焼土の上にも甕が左側の袖に底を埋める形で置かれ、周辺にも甕などがみられる。土器、焼土の下の燃焼部は平らであり、袖は内側から挟った様にくぼんでいる。

出土した土器は、カマド内または周辺からのものが多い。また、住居中央に石と共に廃棄時に入れられたと考えられるものと、カマド周辺の様に住居使用時からそのままの状態であったことが考えられるもの二通りが見られる。

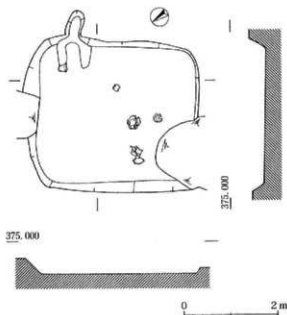


図26 I区SB4実測図 (S=1:80)



I区SB4 (南東から)



I区SB4床出土器・石

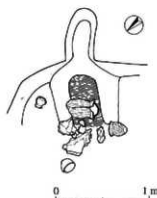


図27 I区SB4カマド
実測図 (S=1:40)



I区SB4カマド



I区SB4カマド (土器取り外し後)

I区-SB5

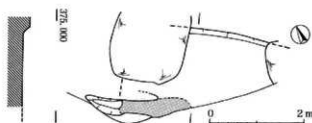


図28 I区SB5実測図 (S=1:80)



I区SB5 (南西から)

J区-SB1

検出面からの掘り込みは16cm強を測る。床面は明瞭ではあるが、しまりはない。

カマドは煙道と粘土構築の袖が両方共残る良好な状態であった。しかし、焼土などはほとんどみられず、カマドの火床面はほぼ平坦となっており、支脚と思われる土製品（第82図-5）がカマド前の覆土から出土している。また出土土器の内、比較的形の残るもののほとんどはカマド周辺からのものであり、出土位置が床面より高い位置にあることから住居廃棄に伴うものと思われる。

カマドの右手には甕が立てた状態で埋められていたことから、埋納ピットと思われるP-3が、また支柱穴ではP-1とP-2の検出があった。

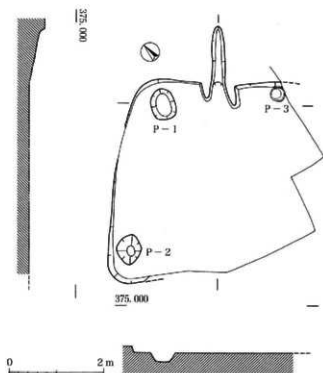


図29 J区SB1実測図 (S=1:80)



J区SB1 (南から)



J区SB1カマド周辺土器出土状況

J区-SB2

検出時、SB1と共に遺構の上部には平安時代の土坑が幾つか掘り込まれていたが、検出面からの掘り込みが36cmと深かった為、検出の状態は良好であった。床面はしまっている。

東側の形態は重複するSB1の床面から住居全体の範囲が確認できた。

カマドは両袖の粘土部分の一部、硬化面と焼土、その中央に支脚を抜いたと思われる痕跡が残る。また、床面よりもやや高い位置では、カマドの前面にのみ石が投げ込まれており、住居廃棄に伴う行為がカマド部のみを対象に行われたことが窺われる。

カマド右側には、破片ではあるが壺が入っているピット（P-1）がある。

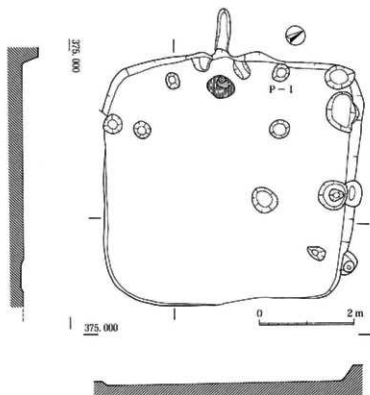


図30 J区SB2実測図（S=1:80）



J区SB2カマド



J区SB2（東から）



J区SB2カマド前面集石



J区SB1・2（東から）

3 奈良・平安時代住居址

AB区-SB1

検出面からの掘り込みは20cmを測る。床面はしまりが良く明瞭である。住居形態は隅が張り出し東壁も外開するなど全体的にやや不整形な形を呈する。

カマドは北壁中央より右に偏して構築され、住居検出時から構築粘土がみられた。しかし、掘り下げていくに従い粘土は奥壁側に残るのみで、袖石も抜かれていることが分かった。カマド内側は硬化面・焼土共に非常に残りの良い状態であった。硬化面の上からは凹石（図79-14）が出土している。

ほぼ床面の位置からは、SB1と南に切り合うSB4の西側の壁面とSB1の北側壁面に沿う様にして30~40cm大の石が並べられていた。SB1・4共時期がほぼ同じ位のものではあるが、使用時に差のある2軒を意識して置かれたことが考えられる。

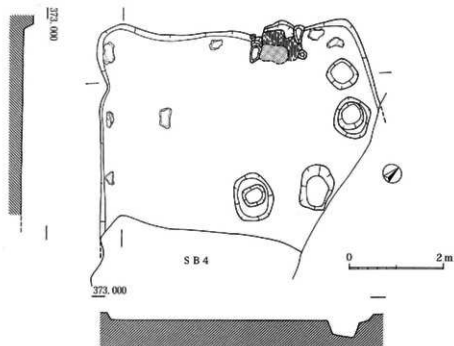


図31 AB区SB1実測図 (S=1:80)



AB区SB1 (北東から)



AB区SB1カマド検出状況

AB区-SB2

南側の一角を井戸址（SE1）により破壊されているが、遺構のほぼ全体が検出された。床面は堅く締まっている。

カマドは北側壁面の中央に構築され、構築材の抜き取り痕などいくつかの掘り込みがあり、その中央に硬化面が残る。抜き取り痕の他には、中央からやや右寄りに支脚石がそのままの状態に残されている。カマド正面には2カ所浅い掘り込みが見られる。カマド奥壁には割った状態の甕が内面を外に向け、壁面に沿って並べられ、住居壁よりも外に出ている。煙道は見られず、カマドは燃焼部が壁外に設けられた所謂突出カマドである。

床面にはいくつかのピットが掘り込まれているが、後世の所産と思われる。床面からのものもあるが、いずれも浅く柱穴の検出はない。

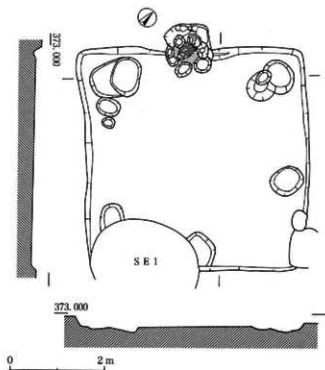


図32 AB区SB2実測図（S=1:80）

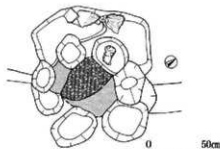


図33 AB区SB2カマド実測図（S=1:30）



AB区SB2（北東から）



AB区SB2カマド



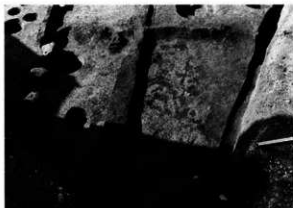
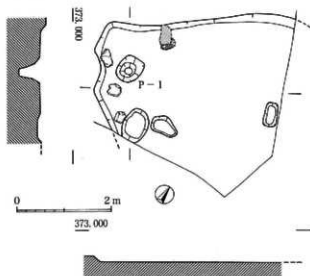
AB区SB2カマド（正面左）



AB区SB1・4・7、SX1 (南東から)

AB区-SB4

住居の形態は西壁が内屈傾向にあるやや不整形な形を呈する。床面はレキが多く露出し、大変軟弱である。カマドは、硬化面とその上に焼土塊が残るのみであった。柱穴はP-1の1カ所があり、比較的深い2段堀のものである。



AB区SB4 (南から)

図34 AB区SB4実測図 (S=1:80)

AB区-SB5

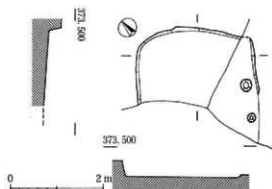


図35 AB区SB5実測図 (S=1:80)



AB区SB5 (北から)

AB区-SB6

B区とA区にわたって住居の全体を検出した。

床面はレキが少なく明瞭である。壁面には一部溝状の掘り込みがみられる。

カマドは西壁中央に構築され、煙道と硬化した焼土火床が残存していた。袖石は左側は抜き取り痕のみであるが、右側は特に袖石にしては大型の石材が手前にあり、その奥にいくつかのレキが並べられている状態で検出された。支柱穴は2カ所 (P-1・P-2) のみが検出された。

遺物は床面からのものはなく、全て覆土中からのものである。その内杯など比較的形の残るものが、主にカマドの前面から出土した。

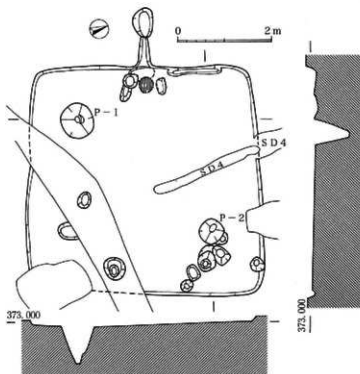


図36 AB区SB6実測図 (S=1:80)



AB区SB6 (東から)



AB区SB6カマド

AB区-SB7

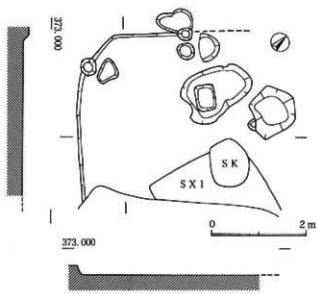
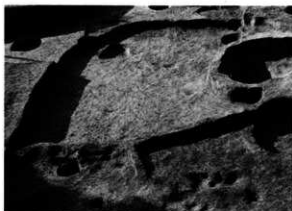


図37 AB区SB7実測図 (S=1:80)



AB区SB7 (北東から)

AB区-SB8

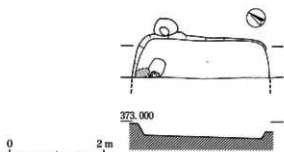


図38 AB区SB8実測図 (S=1:80)



AB区SB8 (南西から)

AB区-SB10

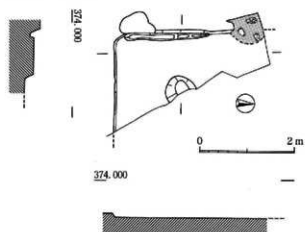


図39 AB区SB10実測図 (S=1:80)



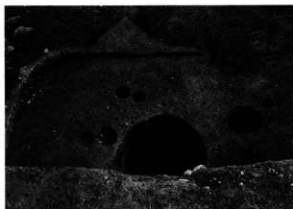
AB区SB10 (南から)

C区-SB2

一部がG区に掛かっての検出であった。中央部分には近代の井戸と思われる遺構が掘り込まれている。

床面は堅く、はっきりとした検出であったが、柱穴を想定できるものはない。

カマドは調査範囲内での検出はなかったが、遺構の検出状態からみると、住居西側に位置している可能性が考えられる。



C区SB2 (東から)

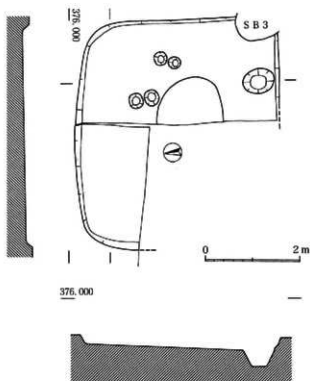
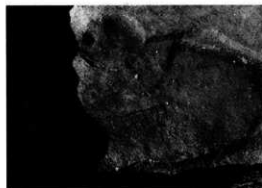


図40 C区SB2実測図 (S=1:80)

C区-SB3

調査区の南東側を中心に、検出面の深さから水が湧き始めていた為、住居全体が水がついた状態での検出となった。しかし、床面は本来レキもなく堅く締まった状態であったと考えられる。

カマドは、左右に袖石の抜き取り痕と中央に火床の焼土が残存していた。上部からは割れた状態の甕が出土した。土器は全体的にカマドの周辺からの出土であった。



C区SB3 (西から)

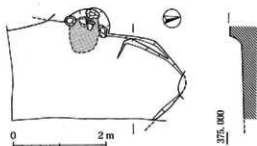


図41 C区SB3実測図 (S=1:80)



C区SB3カマド

D区-SB1

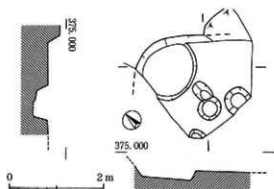


図42 D区SB1実測図 (S=1:80)



D区SB1 (東から)

E区-SB1・2

SB2がSB1に重複しており、立て替えの可能性
がある。床面はレキを多く含んでおり、軟弱である。

カマドは硬化した火床と焼土が残っており、袖石と
考えられるのは右側のもののみである。

また、床面に接して30cm~拳大の河原石がみられ、
住居廃棄の際に投げ入れられたことが考えられる。土
器は破片がほとんどであるが、比較的形の残るものは
カマド周辺にみられた。

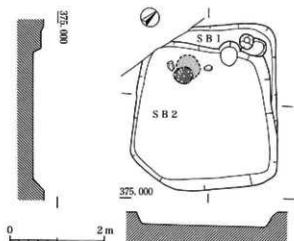


図43 E区SB1・2実測図 (S=1:80)



E区SB1・2 (南東から)



E区SB2カマド

E区-SB3

遺構はほとんどが調査区外に伸びている。その中で調査
区の壁面でカマドの状態をみる事ができた。床面から上
に焼土塊があり、その上部に甕が置かれていた。甕は一個
体分を割り、向きを交互にして置かれたものである。

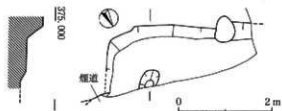


図44 E区SB3実測図 (S=1:80)



E区SB3 (西から)



E区SB3カマド (壁面から)

E区-SB4

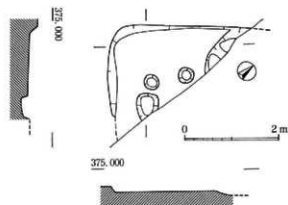
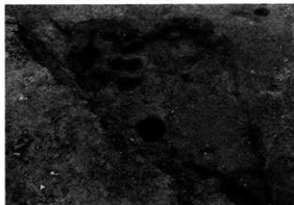


図45 E区SB4実測図 (S=1:80)



E区SB4 (北西から)

E区-SB5

床面はレキの露呈がみられ軟弱である。検出が一部分である為、カマド等の遺構は確認されない。

遺物の出土状態は、土器破片が床面から固まった状態で、住居の壁際または中程にみられる。他には、投げ入れられたと思われる準大のレキが所々に散在していた。

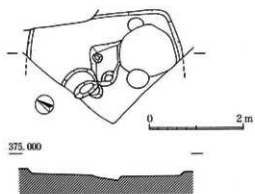


図46 E区SB5実測図 (S=1:80)



E区SB5 (南西から)

F区-SB2

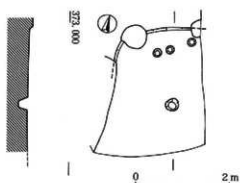


図47 F区SB2実測図 (S=1:80)



F区SB2 (南から)

F区-SB3

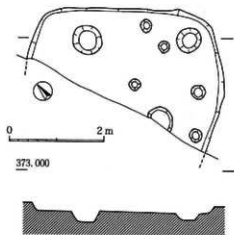


図48 F区SB3実測図 (S=1:80)



F区SB3 (西から)

F区-SB4

検出面からの掘り込みは30cm強と深い。床面は非常に堅く締まっている。

カマドは半分ほどが後世の土坑によって破壊を受けているが、煙道を含め他の残りは良い。上部には焼土塊が煙道にかけて多くみられた。焼土は硬化しており、右側の袖の際にかけて掘り込まれている。袖部は粘土構築によるもので、石材などはみられなかった。

住居内施設としては、カマドの右側の土坑は2段階のもので、貯蔵穴としての機能が考えられる。

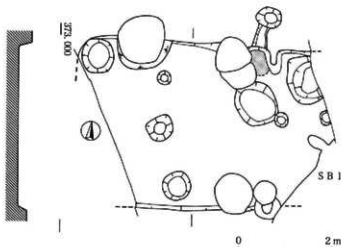
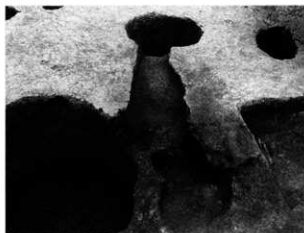


図49 F区SB4実測図 (S=1:80)



F区SB4カマド (焼土検出)



F区SB4カマド (焼土下)



F区SB4 (南から)



F区SB4 周辺 (西から)

G区-SB1

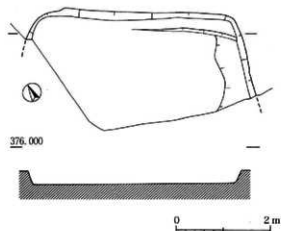
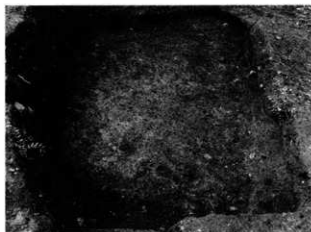


図50 G区SB1実測図 (S=1:80)



G区SB1 (東から)

G区-SB2

検出面からの掘り込みは40cm近くあり、遺構のはほぼ全体を検出した。床面は堅く締まっている。

土器の出土量は多く、中でも南東側に集中してみられた。この場所では、床面よりも若干上の位置で土器破片と10~40cmの石が固まっている状態であった。掘り下げの中で、土器は上面だけでなく床面まで幾つかが重なる状態であり、石の内の1つは袖石であった。

土器の下は広い範囲での焼土がみられ、カマド跡である事を確認した。尚、焼土内からは鉄滓がみられ、近隣において小鍛冶が行われていたことが窺われる。

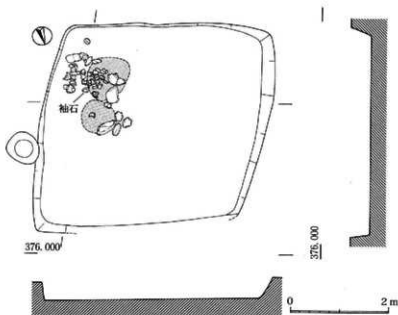


図51 G区SB2実測図 (S=1:80)



G区SB2 (西から)



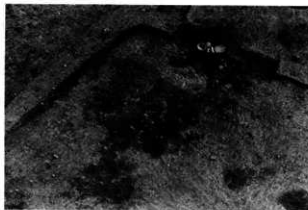
G区SB2カマド土器・石

G区-SB3

SB2と重複し、南側半分が調査区外にある。北西幅7.2mの大型の住居であり、検出面からの掘り込みは30cmを測る。床面は堅く締まっている。

住居の中ほど、SB2と接する場所に焼土の広がりが見られ、住居西側にも炭化面と石を並べた状態のものがあるが、一部の検出であることや位置からみて、本住居に伴うものかの判断は難しい。

床面から12~15cm下にもう1枚床を確認した。これほどはっきりとはしないが、SB2においても床の張り替えを確認した。



G区SB2カマド、焼土面

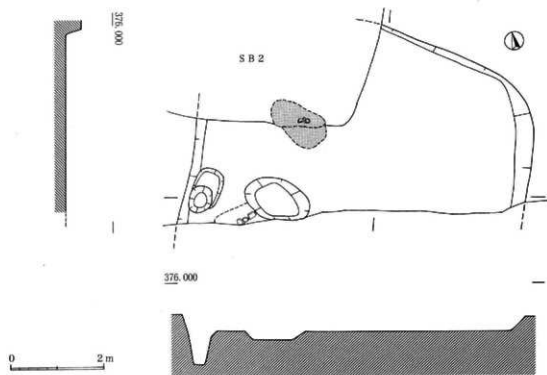


图52 G区SB3実測图 (S=1:80)



G区SB1・2 (南東から)

H区-SB1

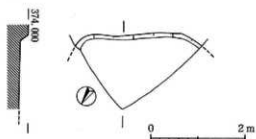


图53 H区SB1实测图 (S=1:80)



H区SB1 (西から)

H区-SB4

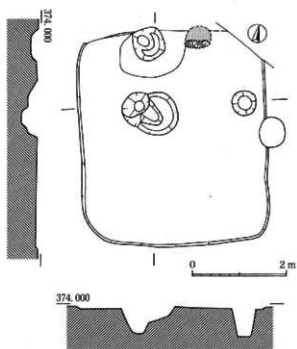


图54 H区SB4实测图 (S=1:80)



H区SB4 (南から)

H区-SB5

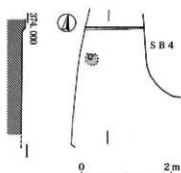
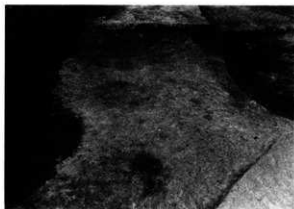


图55 H区SB5实测图 (S=1:80)



H区SB5 (南から)

I区-SB1

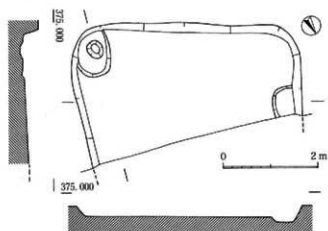


图56 I区SB1实测图 (S=1:80)



I区SB1 (西から)

I区-SB2

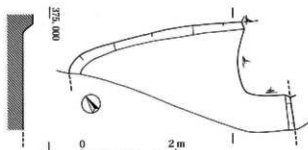


图57 I区SB2实测图 (S=1:80)



I区SB2 (北東から)

I区-SB3

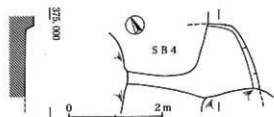
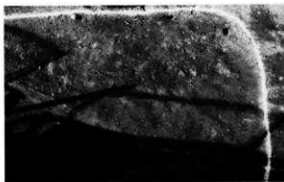
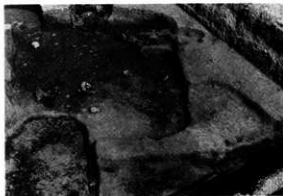


图58 I区SB3实测图 (S=1:80)



I区SB3検出 (南東から)



I区SB3・4・5 (西から)

ⅢC区-SB1

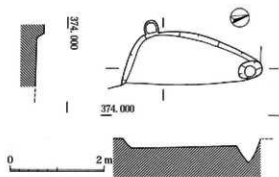


図59 Ⅲ-C区SB1実測図 (S=1:80)



Ⅲ-C区SB1 (北から)

4 建物跡・土坑 他

H区-ST1

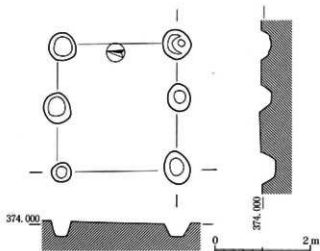


図60 H区ST1実測図 (S=1:80)



H区ST1 (西から)

AB区-SX1

SB1床面からの検出。遺構を一周すると思われる周溝を持つ。

ごく一部の検出であったことから、性格を明らかにしえなかった。

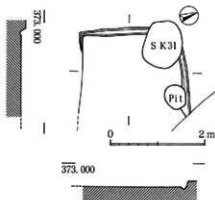


図61 AB区SX1実測図 (S=1:80)



AB区SX1 (南から)

AB区-SE1・2

円形を呈する素掘りの井戸である。2基とも近い位置にある。掘り下げ1mあたりから水が湧き始め、湧水点が高いことが分かる。SE1からは、凹石、五輪塔、石臼が出土している。

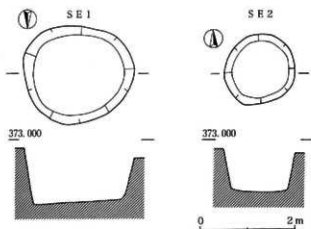
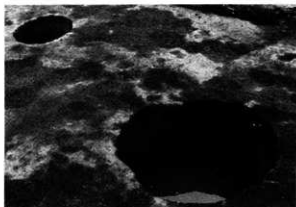


図62 AB区SE1・2実測図 (S=1:80)



AB区SE1・2 (北から)

J区-SK1

楕円状に掘り込まれた土坑で、検出時から石が見え、底部近くまでL字型に並んでいる。土器は上部では土師器・須恵器であるが、下部では土坑の下に弥生時代住居址と重複しているため弥生土器が混じる。

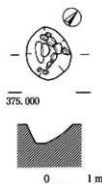


図63 J区SK1
実測図 (S=1:80)



J区SK1 (北西から)

J区-SK5

楕円形の掘り込みの中に杯が入っていたものである。

杯の一部は検出時にみえていたが、底部は不明瞭であったため、深く掘ったが、本来は杯の下のレベルと同じ、検出面から10cm前後(図64-破線部)の所であったと思われる。

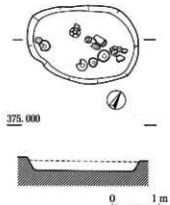


図64 J区SK5実測図
(S=1:80)



J区SK5 (北西から)

表1 遺構一覧表

(i) 住居址

区	遺構名	遺 構					炉・カマド 施設		重 複	備 考	図版番号
		時期	平面形態	規模 (m)	主軸	検出率	位置/種類	検出状況			
AB	1号住居 (SB1)	平安	長方形	-×5.8	北西	2/3	北西壁面右寄り カマド	袖石抜き取り痕 カマド内凹石	SB4・7に重複		図-31
AB	2号住居 (SB2)	平安	正方形	4.7×4.8	北西	完	北西壁面中央 カマド	袖石抜き取り痕 支脚石			図-32・33
AB	3号住居 (SB3)	古墳 (後期)	正方形	-×6.5	北西	1/2	北西壁面中央 カマド	袖石抜き取り痕(?) 煙道・堅化面		一部周溝	図-19
AB	4号住居 (SB4)	平安	長方形(?)	-	北西	1/3	北西壁面左寄り カマド(?)	焼土・硬化面のみ	SB1・7に重複		図-34
AB	5号住居 (SB5)	平安		-×2.7	西	1/3	-				図-35
AB	6号住居 (SB6)	奈良	正方形	4.8×4.9	西	完	西壁面中央 カマド	袖石抜き取り痕 焼土・硬化面		A区・B区に遺構が架かる	図-36
AB	7号住居 (SB7)	平安	正方形(?)	-	北西	1/4	-		SB1に重複し、SB4に切られる		図-37
AB	8号住居 (SB8)	平安	-	-	北西	1/3	北西壁面右寄り カマド(?)	焼土・硬化面			図-38
AB	(9号住居) (欠番)	(奈良)	-	-	-	-	-			住居ではなく同時期の掘り込み	-
AB	10号住居 (SB10)	奈良	正方形(?)	-	西	1/4	西壁面右寄り カマド(?)	焼土とカマドに伴って いたと思われる土器			図-39
C	1号住居 (SB1)	古墳 (後期)	長方形	3.2×4.2	北西	3/4	北西壁面中央 カマド	カマド袖・支脚石 カマド内土器	SB4を重複		図-22・23
C	2号住居 (SB2)	平安	正方形	4.8×4.2	西	3/4	-			遺構の一部が、G区に架かる	図-40
C	3号住居 (SB3)	平安	-	-	西	1/3	西壁面右寄り カマド	袖石抜き取り痕 カマド内土器			図-41
C	4号住居 (SB4)	古墳 (後期)	正方形	3.6×-	北西	1/5	-		SB1に重複		図-22
C	5号住居 (SB5)	古墳 (後期)	-	-	東	1/5	東壁面 カマド	袖部石・堯 カマド内土器		カマドのみの検出	図-20・21
D	1号住居 (SB1)	平安	-	-	-	1/5	-				図-42
E	1号住居 (SB1)	平安	正方形(?)	-	北西	1/5	-		SB2に重複		図-43
E	2号住居 (SB2)	平安	正方形	3.0×3.1	北西	完	北西壁面右寄り カマド	袖石(?) 焼土	SB1を重複		図-43
E	3号住居 (SB3)	平安	長方形	-	南東	1/4	東壁面右寄り カマド	焼土 カマド内土器			図-44

E	4号住居 (SB4)	平安	長方形	—	—	1/3	—				図-45
E	5号住居 (SB5)	平安	長方形	—×3.3	—	1/3	—		SB6を重複	覆土中にSB6の土器を含む	図-46
E	6号住居 (SB6)	弥生 (後期)	長方形	4.5×—	北西	1/3	住居中央 が	突(胴部)を2個重ねた土器埋納が	SB5に重複		図-15・16
F	1号住居 (SB1)	古墳 (後期)	正方形	—	北西	1/3	北西壁面中央 カマド	煙道・焼土	SB4を重複		図-24
F	2号住居 (SB2)	平安	方形	—	—	1/4	—				図-47
F	3号住居 (SB3)	平安	方形	4.2×—	北西	1/2	—				図-48
F	4号住居 (SB4)	平安	長方形	3.5×—	北	3/4	北壁面右寄り カマド	煙道 袖(一部)・焼土塊		カマドを半分後世土坑によって切られる	図-49
G	1号住居 (SB1)	平安	正方形	4.8×—	北東	1/3	—				図-50
G	2号住居 (SB2)	平安	正方形	4.5×4.4	北東	完	北壁面右寄り カマド	袖石・焼土面 カマド内土器	SB3を重複		図-51
G	3号住居 (SB3)	奈良	長方形	6.9×—	北	1/2	—		SB2に重複		図-52
H	1号住居 (SB1)	平安	方形	—	北西	1/5	—				図-53
H	2号住居 (SB2)	古墳 (後期)	正方形	—	北西	1/3	北西壁面中央 カマド	袖石・支脚(石・土器) カマド内土器		カマドを半分後世擾乱によって切られる	図-25
H	3号住居 (SB3)	弥生 (中期)	円形	5.3×4.5	北	完	—		SB4と重複	覆土中にSB4の土器を含む	図-12
H	4号住居 (SB4)	平安	長方形	4.5×4.0	北西	完	北壁面右寄り カマド(?)	焼土・硬化面のみ	SB3に重複、SB5を切る		図-54
H	5号住居 (SB5)	奈良	長方形(?)	—	北西	1/5	(不明)	焼土・硬化面のみ	SB4に重複		図-55
I	1号住居 (SB1)	平安	長方形	—×4.8	北東	1/2	—		SB3.5を重複		図-56
I	2号住居 (SB2)	奈良	長方形	—×4.5	北東	1/3	—				図-57
I	3号住居 (SB3)	奈良	方形	—	—	1/5	—		SB2.4.5に重複		図-58
I	4号住居 (SB4)	古墳 (後期)	長方形	3.2×3.6	北東	完	南東壁面左隣 カマド	袖石・天井石 カマド内土器			図-26・27
I	5号住居 (SB5)	古墳 (後期)	方形	—	—	1/3	北西壁面右寄り カマド	袖部(一部) 焼土面		SB2床面下からの検出(カマド)	図-28
J	1号住居 (SB1)	古墳 (後期)	正方形	4.3×—	北東	3/4	北壁面中央 カマド	煙道・袖部 (覆土中に支脚(土製))	SB2を重複		図-29

J	2号住居 (SB2)	古墳 (後期)	正方形	5.3×5.5	西	完	北西壁面中央 カマド	煙道・袖部(一部) 焼土	SB1に重複		図-30
J	3号住居 (SB3)	弥生 (中期)	楕円形	5.6×-	北西	1/2	-		SB2に重複		図-13
Ⅲ-B	1号住居 (SB1)	弥生 (後期)	長方形	-	東	1/3	-			覆土上層土器が一部混 じる	図-17
Ⅲ-B	2号住居 (SB2)	弥生 (中期)	円形	-	南西	1/4	住居中央	焼土面上に土器			図-14
Ⅲ-B	3号住居 (SB3)	弥生 (後期)	長方形	6.1×4.2	南西	3/4	-			Ⅲ-A区に遺構が一部 架かる	図-18
Ⅲ-C	1号住居 (SB1)	弥生 (?)	方形	-	-	1/5	-				図-59

② 建物址

区	遺構名	遺 構				重 複	備 考	図版番号
		時期	平面形態	規 模	主軸			
H	1号建物 (ST1)	平安	長方形	2間×1間	東西	完	柱穴は1段掘り	図-60

③ 不明遺構

区	遺構名	遺 構				重 複	備 考	図版番号
		時期	平面形態	規模 (m)	主軸			
AB	不明遺構1 (SX1)	平安	長方形	-×2.2	東西	1/4	SB7に重複し、SK に切られる	周溝がめぐる 図-61

④ 井戸址

区	遺構名	遺 構				重 複	備 考	図版番号	
		時期	平面形態	規模 (m)	主軸				検出率
AB	1号井戸 (ST1)	平安	円形	径2.4・深さ1.2	-	完	SB2を切る	井戸内に凹石状石臼、五 輪塔が入れられている	図-62
AB	2号井戸 (ST2)	平安	円形	径1.5・深さ0.9	-	完			図-62

⑤ 土坑

区	遺構名	遺 構				重 複	備 考	図版番号	
		時期	平面形態	規模 (m)	主軸				検出率
J	1号土坑 (SK1)	平安	楕円形	径1.0・深さ0.4	-	完	SB3直上	一部弥生土器が混じる	図-63
J	5号土坑 (SK5)	平安	楕円形	径2.3・深さ0.1	-	完	SB2直上		図-64

第V章 遺 物

調査においては、縄文、弥生、古墳、古代の各時期の遺物が出土した。この内、土器・石器・鉄製品・土製品・銅銭の各節を設け、遺物の概要と図版とを示した。また、表2 遺物一覧表では、遺構の内遺物が図版に掲載されているものを中心に、その他の遺構については調査区ごとにまとめて出土遺物の概要を載せている。なお、土製品と銅銭は出土したもの全ての図版に掲載した。この他の各遺物についての図版掲載の実測個体の選別基準と概要について以下に述べる。

土器

遺跡全体での総出土量は、約435kgである。種別では縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器がある。このうち縄文土器は破片のみの出土であったため、その中で比較的文様のわかるものを実測個体とした。弥生土器・土師器・須恵器については土器の接合後、口縁部または底部の径が全周の2分の1以上残るものを選び、実測個体とした。その結果、縄文土器2点、弥生土器27点、古墳時代土器42点、古代土器70点（内土師器93点、須恵器19点）を図版に示した。

石器

弥生時代のものでは扁平片刃石斧、石鏃が出土した。この他には剥片があり、総量は358.6gである。石材は頁岩・チャートを主とし、黒曜石を1点含む。出土位置はピットからのものもみられるが、ほとんどは古墳時代以降の遺構による影響の為、検出面や他の時代の覆土に少数ずつ混じる状態である。凹石状石臼（すり石）は、主に住居内にあった河原石の中で、加工痕が明確に見られるものを選び出した。他、図版に掲載されていないものでは、石臼（残存量4分の1）、五輪塔（火輪）がある。

鉄製品

鉄鏃・紡錘車など、残りの状態が良いものを選び計6点を図版に、住居内焼土面出土の鉄滓を写真のみで示した。この他にはごく一部である為、器種の判別ができないものが9点程ある。形状は細長い棒状のものが大半で、主に奈良・平安時代の住居またはその付近からの出土である。

1 土器

(1) 縄文時代土器 (図65)

- 1 深鉢：口縁部双翼状突起が付き、溝状沈線が巡る。外面は区画内に竹管状工具による刺突がみられる。
- 2 器種不明：隆帯の渦巻き文が付き、その上部に刺突がある



図65 縄文時代土器実測図 (S = 1 : 3)

(2) 弥生時代土器 (図66~68)

B区-pit10 (図66-1) 甕：口唇部縄文、胴部、縄文(LR)充填に櫛状工具によるハケ調整。

E区-SB6 (SB5) (図66-2~6) 2 甕：簾状文(等間隔止)2段、下に波状文を1段、以下はハケで底部から胴部にかけて黒斑がある。3 甕：頸部簾状文、胴部櫛描のやや荒い羽状文。底部はケズリにより平坦。4 甕：外面ハケメと一部にナデがみられる。器壁は凹凸があり、指頭痕が残る。5 甕：外面ハケ調整、底部に黒斑があり、内面にはススが附着している。4・5は土器埋納炉(5が内側)のものであり、検出の状況からは埋納時の状態での出土であったと考えられる。6 甕：口縁は受け口を呈する。頸部にヘラ描沈線と鋸歯文。外面・内面と口縁部から頸部にかけて赤彩がみられる。

H区-SB3 (図66-7) 甕：口縁受け口状、口縁部にヘラ描き山形文、ハケ調整。

J区-SB3 (図66-8・9、図67-10~17) 8 甕：頸部ヘラ描き沈線文4本、間に竹管状工具による押し引点文、内面ハケ調整は荒く凹凸を残す。9 甕：上面形態は波状をなす。頸部ヘラ描沈線、鋸歯文、口縁部は、突起があるもので、波状の残存部は4カ所ある。10 甕：残存で44cmの大型のもの。口縁受け口を呈し、口縁部にヘラ描山形文、頸部に簾状文(等間隔止)、胴部にはハケメを残す。外面には摩耗により不明瞭であるが、赤彩が僅かにみられる。11 鉢：内外面とミガキ、赤彩がされる。12 甕：口唇部にキザミ、ハケ調整。13 鉢：2個1対の緊縛孔が1カ所ある。調整はミガキで内面・外面共に赤彩がされる。14 甕：口唇部縄文、頸部波状文、胴部櫛状工具による山形文に近い波状文。15 甕：棒状縄文(LR)地にヘラ描沈線と山形文、その下3列の山形文に刺突のある円形浮文が付く。16 甕：口唇部縄文、胴部櫛状工具による斜交条線文。17 甕：口唇部縄文、頸部波状文、胴部櫛状工具による羽状文。

J区-SK9 (図67-18) 鉢：内面・外面とも丁寧なハケ。底部を中心に黒斑がある。

ⅢB区-SB1 (図68-19) 甕：頸部に簾状文(2連止)、胴部はやや間延びした波状文(施文上→下)、内面は頸部下で上から下へ回しながらのハケ調整。

ⅢB区-SB2 (図68-20~25) 20 甕：口縁は受け口状を呈する。口縁部ヘラ描山形文2段、頸部に沈線文、以下に櫛状工具によるハケメと山形文。21 鉢：器形は胴部の張ったそろばん玉形を呈する。2個1対の緊縛孔が2カ所ある。外面・内面とヘラミガキ・赤彩がされる。22 蓋：ハケ調整・上部ユビオサエ。23 蓋：ハケ調整・上部ユビオサエ。24 甕：頸部縄文(LR)充填・ヘラ描平行沈線文、胴部垂下文(11本)、胴部下半縄文充填、沈線文・山形文2段。25 高杯：口縁波状形態、外面ハケ調整・ヘラミガキ、内面は丁寧なミガキがされ黒色である。

ⅢB区-SB3 (図68-26・27) 26 片口鉢：内面・外面ともミガキ・赤彩がある。27 台付甕：頸部簾状文(等間隔止)、胴部波状文(施文上→下)。黒斑がみられる。

H区-SB3、J区-SB3、ⅢB区-SB2が中期に、B区-pit10、E区-SB6、J区-SK9、ⅢB区-SB1・3が後期に属する。

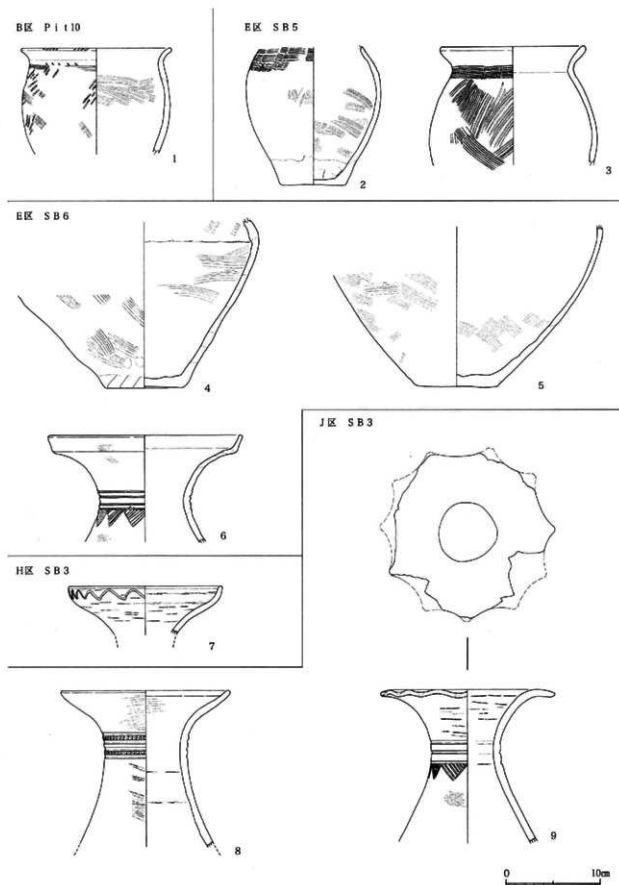


图66 弥生时代土器实测图① (S=1:4)

JK SB3

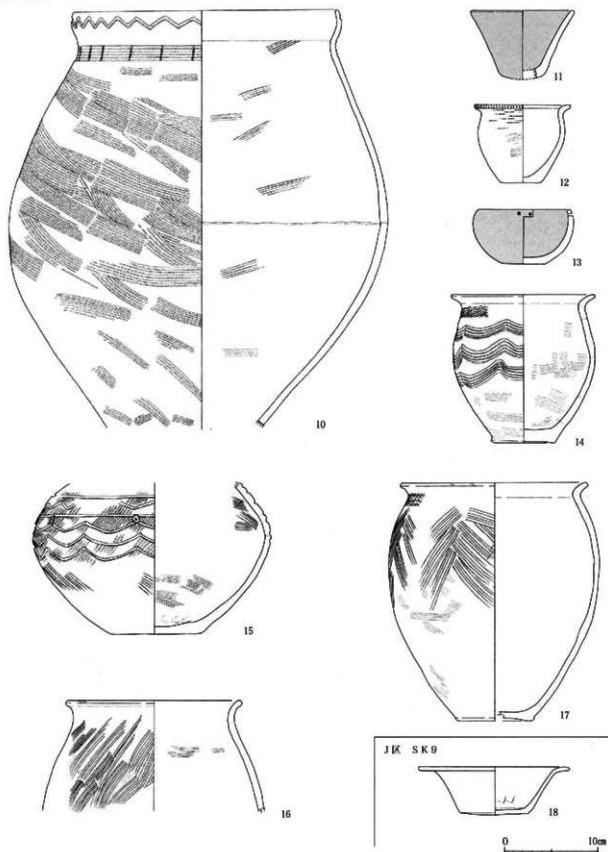
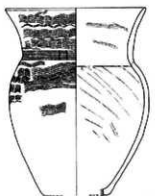
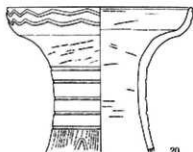


图67 弥生时代土器实测图② (S=1:4)

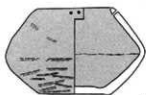
III区 SB1



19



20



21

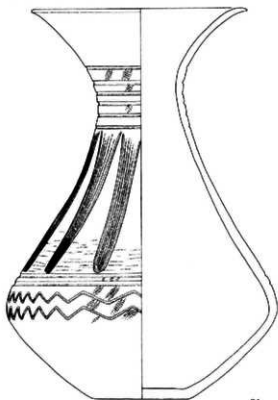


22

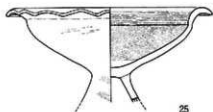


23

III区 SB2



24



25

III区 SB3



26



27

0 10cm

图68 弥生时代土器实测图③ (S=1:4)

(3) 古墳時代土器 (図69~72)

AB区-SB3 (図69-1~7) 1・2 杯:内黒処理が施される。底部はケズリで、1は内面に暗文状にミガキがある。3 罎:胴部が全体に球形を呈する。外面調整は丁寧ミガキで底には黒斑がみられる。4 鉢:口縁部の径が19cmと大きい。内・外面共にミガキが施され、内黒処理がされている。5・6・7 高杯:5・6は杯部のみで、低くハの字に広がる。坏部には内黒処理がみられる。7の杯部は稜のない碗形で内面ヘラミガキ・内黒処理がされる。

C区-SB1 (図69-8~13) 8 甕:胴部は丸く、頸部のくびれは浅い、外面調整は細かいハケ。9 須恵器:坏口縁部内側に立ち上がりを持つ。赤味の強い褐色を呈し、底部は丸く全体の3分の2に回転ヘラケズリがある。10 高杯:坏部は内黒処理がされ、体部の稜はにぶい。11~13 長胴甕:口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ調整、内面板状工具によるナデ調整。

C区-SB5 (図70-14) 長胴甕:外面は全体にケズリだが調整は荒く、粘土接合痕がみられる。

G区-SK1 (図70-15) 甕:把手付、器形は口縁に向かって開く。長胴タイプのもので、器高は残存部で22cmある。

H区-SB2 (図70-16~20) 16 高杯:坏部は碗形を呈する。内外面ヘラミガキ・内黒処理。全体に黒斑がみられる。17 長胴甕:胴部調整はケズリ。口縁部が大きく歪む。18 壺:頸部が長くコの字型を呈する。胴部との境は強いナデ、外面は丁寧なハケ調整。19・20 坏:碗形、内外面ヘラミガキ・内黒処理がされ、20には内面に放射線状暗文。

J区-SB1 (図70-21~24、図71-25~28) 21・22・25~28 長胴甕:外面調整はケズリ、内面は板状工具によるナデ調整。全体に器壁の厚さは均一でなく器形もいびつである。23・24 甕:内黒処理。23は外側からの穿孔が16個ある。外面調整はケズリ。

J区-SB2 (図71-29~33) 29~31 甕:29は頸部は直立し、コの字型に近い形である。30・31口縁は外開し、くの字に近い形となる。胴部球形。外面調整はいずれもミガキ。32 鉢:頸部ヨコナデ、内外面ヘラミガキ、内面は内黒処理。33 坏:底部丸底で稜は鈍い。内外面ヘラミガキ、内面は黒色処理される。

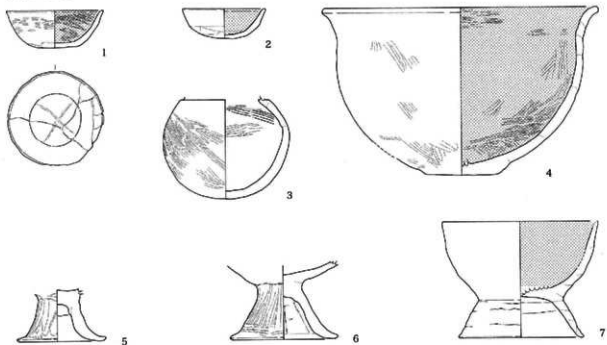
I区-SB4 (図72-34~41) 34・35 坏:底部は丸く、上部では僅かに稜がみられる。調整はミガキで内黒処理がされる。36・37 鉢:内外面ヘラミガキ、37の体部下半はヘラナデ、36は内面内黒処理。38 小型甕:外面ハケ調整。39 甕:把手付、器高は25cmと小型である。40 長胴甕:底部は丸みをおび、器高は39cmと大型。胴部外面ハケ調整。41 須恵器甕:頸部から胴部上半にかけてはロクロナデ、以下はタタキで内面青海波文。

I区-SB5 (図72-42) 鉢:内外面ヘラケズリ。

種類別では特に黒色土器が多いことが挙げられる。坏や高杯はミガキ調整で、器形は上部または下部に稜を残すものと須恵器の模倣が考えられるものがある。また、長胴甕も多くみられる。多くはケズリ調整のものであるが、C区-SB1ではハケ調整でやや胴部が張るものがみられる。器高は30~35cmであるが、I区-SB4例では39cmを測り、これと併せて甕は把手付の長胴のものである。須恵器はTK43型式段階に位置するC区-SB1例とI区-SB4例とがある。

以上を併せて、古墳時代遺構の時期は古墳時代後期、6世紀後半段階からみられ始めるものと考えられる。

AB区 SB3



CK区 SB1

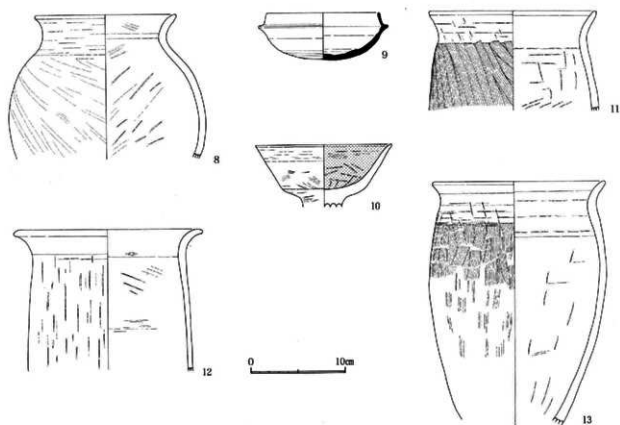
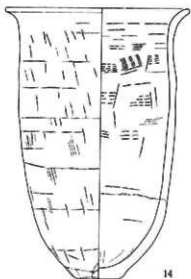
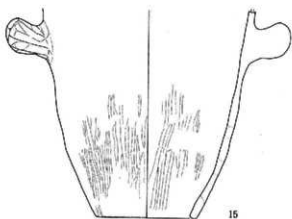


图69 古墳時代土器実測図① (S=1:4)

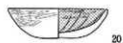
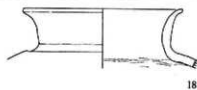
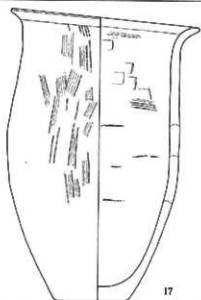
CK SB5



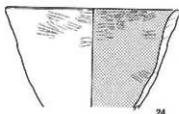
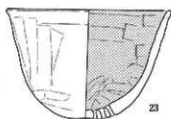
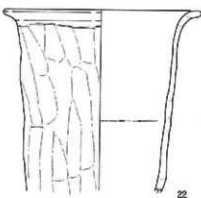
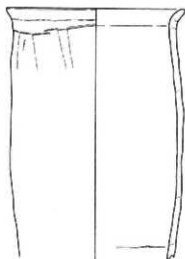
GE SK1



HE SB2



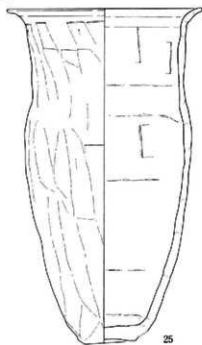
J区 SB1



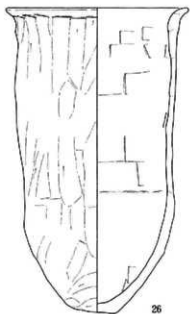
0 10cm

图70 古墳時代土器実測図② (S=1:4)

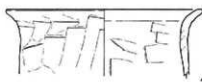
J区 SB1



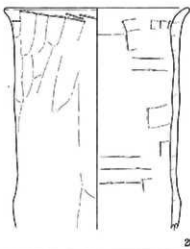
25



26

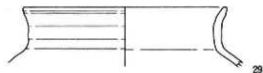


27

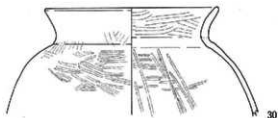


28

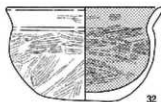
J区 SB2



29



30



32



31



33

0 10cm

图71 古墳時代土器実測図③ (S=1:4)

I区 SB4



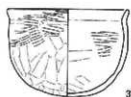
34



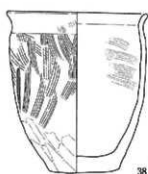
35



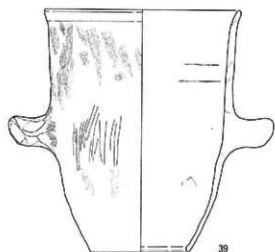
36



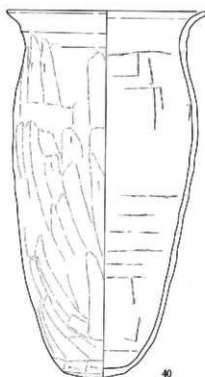
37



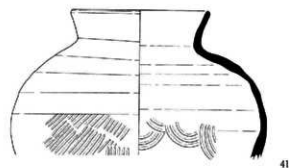
38



39



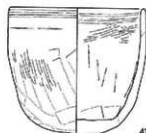
40



41

0 10cm

I区 SB5



42

图72 古墳時代土器実測図④ (S=1:4)

(4) 古代土器 (図73~76)

A区 (図73、74-17-24・26) 1・6・23 蓋:1、つまみ部を欠損する。外面回転ヘラケズリは全体にある、端部は垂直。6、天井部は丸みを持ち、外面回転ヘラケズリは半分以下。端部は強く内側に屈曲する。23、天井部は直線的で全面に回転ヘラケズリがされ、端部はほぼ垂直となる。2~4・8・26 甕:2・3・4、胴部外面上半にロクロナデ・以下ヘラケズリ、内面にカキメ。8、外面ハケ調整。26、外面ヘラケズリ。5・9・10・12~16 土師器杯:外面ロクロナデ、底部は回転糸切り。18・22 黒色土器杯:18は外面、22は底部にヘラ記号。7・11 黒色土器碗:ロクロ成形。内面放射状にミガキがされ、内黒処理。底部は高台張り付け後ナデ調整。17 須恵器杯:ロクロ成形。底面ヘラ切り後にナデ。19 高台杯:高台底部外縁貼り付け、底部回転ヘラケズリ。20 甕:底部籐状、ロクロ成形で焼成は土師質。内面ヘラミガキで底部の敷か所に棧受け用の窪みがある。21・24 高杯:21は杯部内面ヘラミガキ・黒色処理。24の外面ヘラケズリ・内面は暗文状のヘラミガキに黒色処理。

C区 (図74-25・27-29) 25 黒色土器碗:ロクロナデ調整、内面ヘラミガキ、黒色処理。27 土師器碗:ロクロナデ調整、高台貼り付け。28 須恵器杯:ロクロナデ調整、底部は回転糸切り。29 甕:外面胴部上部をロクロナデ、下半ヘラケズリ、内面はカキメ。

E区 (図74-30-35) 30 甕:器形は砲弾型を呈する。調整は内面・外面共に上半がロクロナデ、下半ヘラケズリ、内面はカキメ。また口縁部には強いナデによって段が作られる。31 須恵器杯:ロクロ調整。底部回転糸切り。32 蓋:天井部はやや丸みを持つ、全面にヘラケズリ、端部は内側に屈曲する。33-35 土師器杯:ロクロナデ調整、底面回転糸切り。

F区 (図75-36・37) 土師器杯:碗形で外面上半には強いナデによる条線がみられる。下半はヘラケズリ。36は内面ヘラミガキ。

G区 (図75-38-47) 38-40・44・45 須恵器杯:ロクロナデ調整。38・44・45は底面回転糸切り、39はヘラ切り、40は糸切後ヘラ調整。47 高台杯:底面回転糸切り、高台貼り付け後ケズリ。41・46 甕:41の胴部上半内外面ロクロナデ、下半ヘラケズリ。46の胴部外面ハケ調整。42 壺:ロクロナデ調整、底面は高台貼り付け後ケズリ。自然輪がみられる。43 小型甕:ロクロナデ調整、底面回転糸切り。

H区 (図75-48-50) 48 須恵器杯:ロクロナデ調整、底部回転糸切り後ケズリ調整。49 土師器杯:ロクロナデ調整、底面回転糸切り。50 黒色土器杯:ロクロナデ調整、内面ヘラミガキ・黒色処理。

J区 (図75-51-56、図76) 51 須恵器杯:ロクロナデ調整、底面回転糸切り。58 土師器碗:ロクロナデ調整、足高台。54-57・60 黒色土器碗:ロクロナデ調整、内面黒色処理、55・60の内面ヘラミガキ。52・53・61-70 土師器杯:ロクロナデ調整、底面回転糸切り。59 黒色土器杯:内面黒色処理、底面回転糸切り。

土師器・黒色土器杯はロクロ調整で底部は回転糸切りのものを主体とする。この内、僅かではあるが糸切痕をナデによって調整するものもみられる。その後はやや複雑な作りで器高が2.5cm前後と小型のものが多くみられるようになる。甕は大きく分けてハケ・ケズリ調整による古墳時代からのものと、ロクロナデ・カキメ調整のものがある。また、図版にはないが、羽釜(A区-SB1他)が出土している。以上の傾向から、非ロクロ土師器杯と底面ヘラ切りの須恵器杯などがあるB区-SB6が7世紀後半から8世紀にかけての時期が考えられ、以後の時期の遺構では、須恵器を主体として軟質須恵器、須恵器模倣の甕などを持つもの、黒色土器が主体となるものとみられる。特に住居址では10世紀代の所産が考えられる。全体では古墳時代後期から10世紀段階まで連続していたものと考えられる。

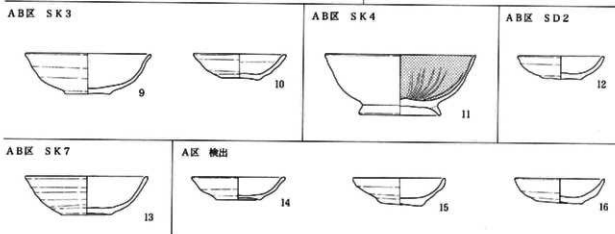
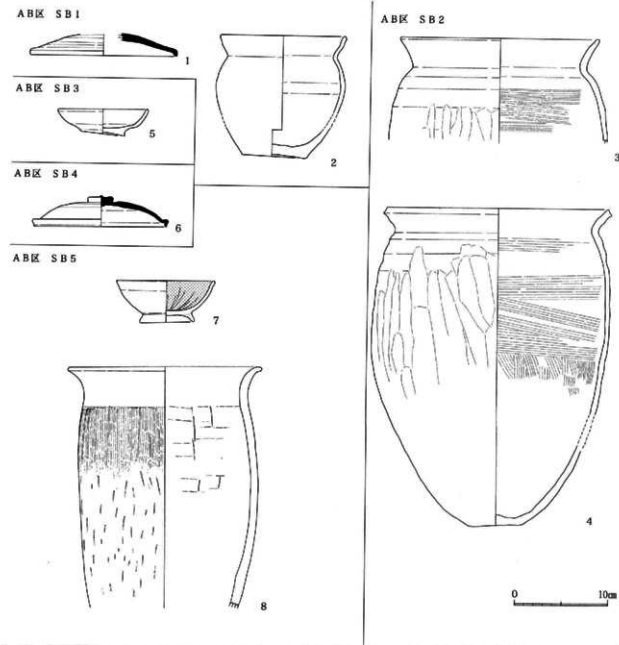
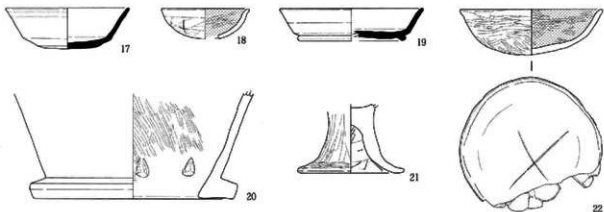
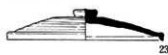


图73 古代土器実測図① (S=1:4)

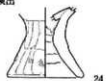
AB区 SB6



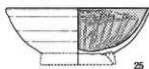
AB区 SB9



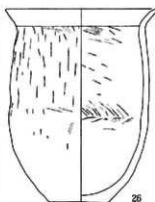
B区 検出



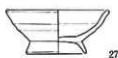
C区 検出



AB区 SB10



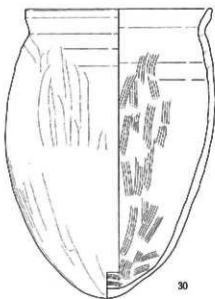
CK区 SB2



CK区 SB3



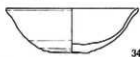
E区 SB2



EK区 SB2



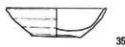
E区 P115



E区 SB1



E区 検出



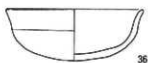
E区 SK1



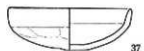
0 10cm

图74 古代土器実測图② (S=1:4)

F区 SB4



36



37

G区 SB1



38

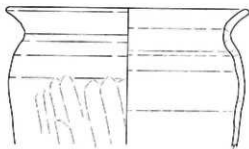


39



40

G区 SB2



41



42



44

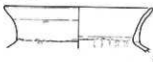


45



43

G区 SD1

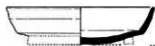


46

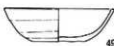


47

H区 検出



48



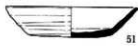
49

H区 SB5



50

J区 検出



51

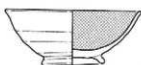


52

J区 SK1

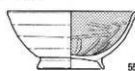


53



54

J区 SK2



55



56



图75 古代土器実測図③ (S=1:4)

JK SK5

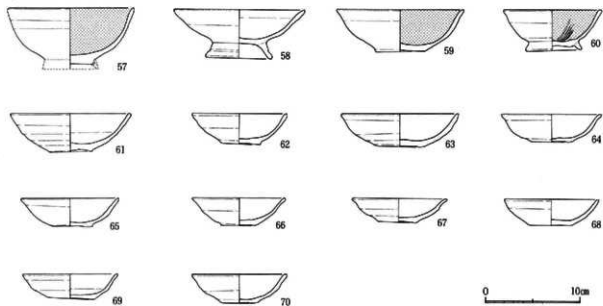


图76 古代土器实测图④ (S = 1 : 4)

2 石器 (図77~79)

打製石鏃 (図77-1・2) 1 長さ(残存部)3.0cm、最大幅1.2cm、重量1.1g。チャート製。基部を欠損している凹基有茎鏃である。2 長さ(残存部)3.0cm、最大幅1.6cm、重量1.8g。チャート製。下半を中心に不純物を含む。基部は欠損しているが、有茎鏃と考えられる。

磨製石鏃 (図77-3・4) 3 長さ(残存部)3.0cm、最大幅1.7cm、重量1.2g。頁岩製、凸基無茎鏃。筋状に不純物を含む。中央の穿孔は一方から行われており、反対の面では穿孔の際の剥離がみられる。4 長さ3.8cm、幅1.2cm、重量1.1g。頁岩製、穿孔は一方からで、途中で止まっている。

磨製扁平片刃石斧 (図77-5) 長さ7.7cm、幅5.3cm、厚さ1.3cm。頁岩製。刃部を僅かに欠くのみで状態は良好である。

砥石 (図78-6~9) 6 持ち砥石；長さ10.4cm、幅3.9cm。砂岩製。全体に研がれており、表面には敲打痕がみられる。7 持ち砥石；長さ8.8cm、幅2.5cm、厚さ9mm。砂岩製。一面のみが平らに磨かれている。反対面は僅かに磨かれた跡はみられるが、自然面が残る。8 持ち砥石；長さ(残存部)7.9cm、幅4.7~3.1cm、厚さ2.8~2.0cm。砂岩製。約2分の1が残る。表面は端から中央に向かって深くなる様に研かれる。側面も磨かれているが、裏面は自然面を残し、幾本の筋が描かれている。9 置き砥石；長さ27.1cm、幅8.6cm、厚さ1.8cm。頁岩製。長い板状で、一部割れているが、短辺は斜めに加工されている。擦り痕はタテ方向に見られる。

紡錘車 (図78-10) 直径3.3cm、厚さ1.2cm。中央に径7mmの孔が一方から開けられている。滑石製で両面とも面取りがされている。検出面からの出土であり時期は不明であるが、形態から紡錘車の可能性が考えられる。

凹石状石臼 (図79) いずれも河原石を使用している。13の窪み面は、他の面に比べて一面のみが滑らかであることから、擦り石としての機能が考えられる。12は窪みが深く、残りが半分のみであるが、底部はやや平らで座りの良いものである。11、14、15は窪み面が敲打によるもので、11は斜面部に6.5cmの大きさで一カ所に、14は中央の一番大きな窪みの上下に小さな窪みが2カ所の全3カ所に敲打痕がある。15においては、両面を使っており、敲打の際にはある程度使用したら場所をかえつつ、石材全体を使っていたことがうかがえる。

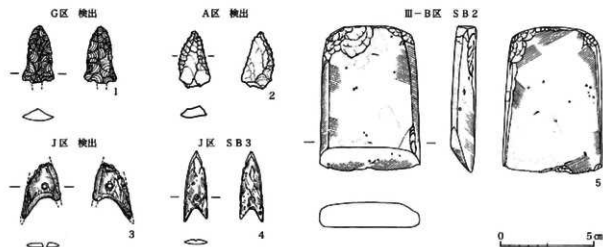


図77 石器実測図① (S=1:2)

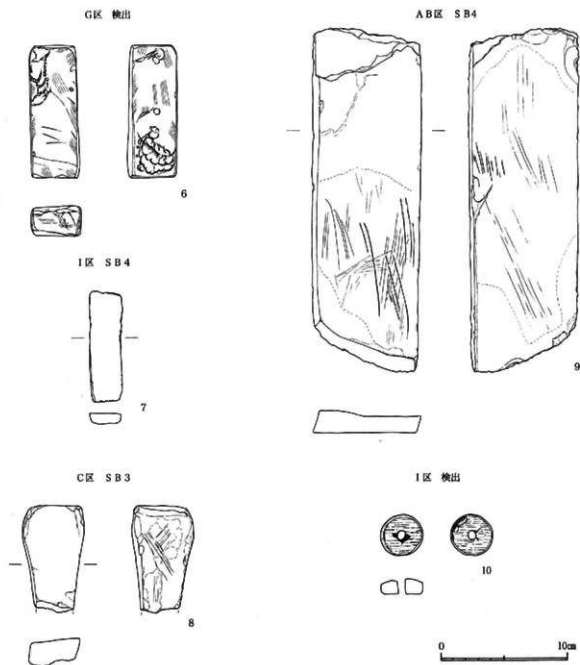


图78 石器实测图② (S=1:3)

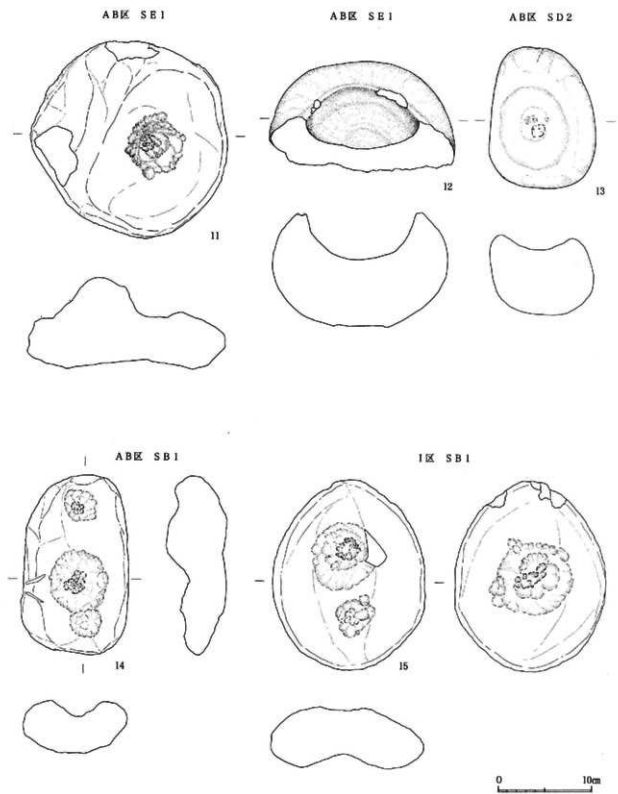


图79 石器实测图③ (S=1:4)

3 鉄製品 (図80・81)

鉄鏃(図80-1) 全長12.2cm、鏃部長さ8.1cm、最大幅2.0cm、厚さ3.5mm。基部長さ4.1cm、厚さ6mm。基部が一部欠損するのみで、遺存状態は良好である。身部は平面形、柳葉形を呈する長三角形、両丸造り。身部両側は楕円形を呈する。基部・莖被部共にやや台形に近い方形を呈する。身部は全体に同じ厚さであり、緻密な造りである。

鉄鏃(図81-2) 全長11.5cm、基部幅2.1cm、厚さ3mm。欠損はなく残りが良い。刃先は幅に対して長く湾曲している。ひねり曲しは全体に曲げられており、柄との角度はほぼ90度である。出土位置は、平安時代住居(E区-SB2)のカマド横からであり、同時代の所産である。

楔(図80-3) 全長9.9cm、幅1.6cm、厚さ5~9cm、図右側はやや湾曲し、端は斜めになっている。左側はわずかに欠けているが幅は若干細くなり、長さは残存量と変わらないものと思われる。出土位置は古墳後期と平安時代の住居(A区-SB1・3)とが重複する位置であり、時期の決定はし得ない。

紡錘車(図81-1) 紡輪径5.3cm、紡軸径6.5cm。紡軸のほとんどは細かく折れた状態である。出土位置は住居覆土中(G-SB3)であり、住居の時期が奈良時代であることから、この時期の所産であると考えられる。

鏃(図81-2) 長さ(残存部)8.3cm、幅(中央部)9mm。出土は古墳時代後期住居(I区-SB4)覆土中からの出土である。基部は断面正方形を呈し、中央部が太く端に行くにつれて細くなる。

毛抜き(状)(図81-3) 全長8.4cm、幅7mm、厚さ2.9mm。輪になっている部分が欠損している。先端部は左右が錯により付着しているが、外側から先を薄く尖らせている様子がみられる。

鉄滓(写真のみ) 大きさ9.0×7.0cm、重さ345g。平安時代住居(G区-SB2)カマド上部、焼土中からの出土である。

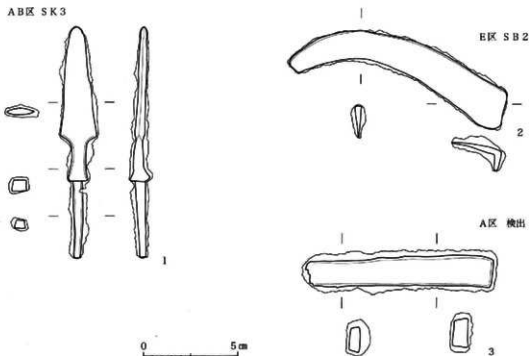


図80 鉄器実測図① (S=1:2)

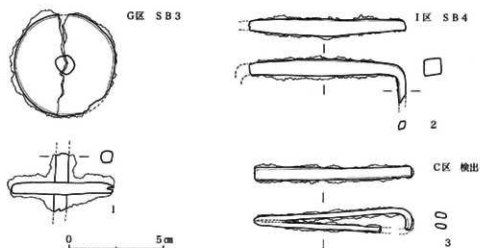


図81 鉄器実測図② (S=1:2)

4 土製品 (図82)

土製円板 (図82-1~4) いずれも土器片を加工したものである。中央に穿孔がされており、両方向から開けられたものと、片側からのみのものがある。

支脚 (図82-5) 長さ11.5cm、径5.2cm。転用品と考えられ、下部には2次焼成の痕がみられる。住居 (G区-SB1) カマド前面よりの出土であり、支脚の可能性はある。

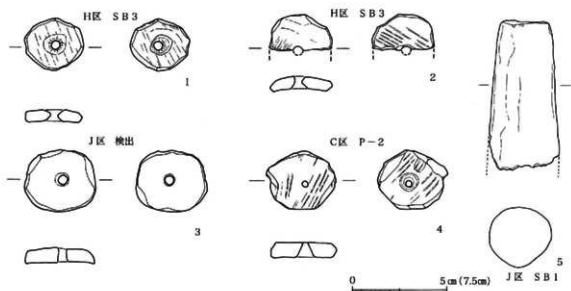


図82 土製品実測図 (S=1:2, 5のみS=1:3)

5 銅銭 (図83)

寛永通宝。残りは良く、奈良時代の掘り込みから1点のみ出土。



図83 銅銭拓影 (S=1:1)

表2 遺物一覧表

区	遺構名	土 器		器 種 概 要	図版	他 遺 物	図版
		出土総重量 (g)	種類/実測数				
A B	1号住居 (S B 1)	8,493	土師器1・須恵器1	杯(土師・須恵)・羽釜・蓋 甕・小型甕	図73-1, 2	凹石状石白	図79-14
A B	2号住居 (S B 2)	9,843	土師器2	杯(土師・須恵)・甕	図73-3, 4		
A B	3号住居 (S B 3)	18,673	土師器8	杯(土師・内黒処理) 甕・瓶・高杯・小型	図69-1~7 図73-5		
A B	4号住居 (S B 4)	2,025	須恵器1	杯蓋 須恵器甕	図73-6	置き砥石	図78-9
A B	5号住居 (S B 5)	4,025	土師器2	甕・杯	図73-7, 8		
A B	6号住居 (S B 6)	10,221	土師器4・須恵器2	杯(土師・須恵)・高杯 甕	図74-17~22		
A B	7号住居 (S B 7)	560		杯・甕・高杯 須恵器甕			
A B	8号住居 (S B 8)	699		杯(須恵)			
A B	(9号住居 (欠番))	3,228	須恵器2	蓋	図74-23	銅銭(寛永通宝)	図83
A B	10号住居 (S B 10)	2,247	土師器1・須恵器1	杯(高台付き)・甕	図74-26		
A	1号井戸 (S E 1)					凹石状石白 2 (石白・五輪塔)	図79-11, 12
A	性格不明 (S X 1)	780		須恵器・土師器片			
A	他 遺構	9,804	土師器5	土師器・須恵器片	図73-9~13	鉄鏝	図80-1 (S K3)
A	検出面	18,982	土師器3	高杯・甕・坏・須恵器甕 (弥生土器片)	図73-14~16	打製石鏝・榎 刺片(197.6)	図77-2 図80-3
B	他 遺構	4,082	弥生土器1	土師器・須恵器片 (弥生土器片)	図66-1	凹石状石白	図79-13
B	検出面	14,589	土師器1	土師器・須恵器	図74-24	刺片(110.4)	
A B区	土器合計	108,251					
C	1号住居 (S B 1)	8,825	土師器5・須恵器1	甕・高杯・壺・須恵器杯	図69-8~13	刺片(5.8)	
C	2号住居 (S B 2)	1,899	土師器1	坏・甕	図74-27		
C	3号住居 (S B 3)	2,572	土師器1・須恵器1	坏・甕・須恵器蓋・羽釜	図74-28, 29	持ち砥石	図78-8
C	4号住居 (S B 4)	691					
C	5号住居 (S B 5)	6,829	土師器1	甕・坏・高杯	図70-14		
C	他 遺構	187	土師器1	椀(釉有り)		土製円板	図82-4
C	検出面	10,562	土師器1	土師器坏・須恵器甕	図74-25	毛抜き状鉄器	図81-3
C区	土器合計	31,565					
D	1号住居	1,568		甕		刺片(7.3)	
D	他 遺構	277		土師器・須恵器片			
D	検出面	1,510		甕・坏			
D区	土器合計	3,355					
E	1号住居 (S B 1)	770	須恵器1	須恵器蓋	図74-32		

E	2号住居 (S B 2)	3,200 土師器1・須恵器1	甕・坏	図74-30, 31	鉄鎌	図80-2
E	3号住居 (S B 3)	2,996	坏・甕・須恵器甕			
E	4号住居 (S B 4)	159				
E	5号住居 (S B 5)	5,300 (弥生土器2)	須恵器蓋・甕・坏	図66-2, 3		
E	6号住居 (S B 6)	5,929 弥生土器3	壺	図66-4~6		
E	他 遺構	379 土師器2	土師器・須恵器片	図74-33, 34 (S K1・P i t 5)		
E	検出面	11,422 土師器1	須恵器甕・轆(灰軸)	図74-35		
E区	土器合計	30,155				
F	1号住居 (S B 1)	485				
F	2号住居 (S B 2)	97				
F	3号住居 (S B 3)	1,498	甕			
F	4号住居 (S B 4)	6,005 土師器2	須恵器蓋・甕	図75-36, 37		
F	他 遺構	2,399	須恵器・土師器片 弥生土器片			
F	検出面	733				
F区	土器合計	11,217				
G	1号住居 (S B 1)	12,597 須恵器3	坏	図75-38~40		
G	2号住居 (S B 2)	22,054 土師器2・須恵器3	甕・坏	図75-41~45	銅片(14.1)	
G	3号住居 (S B 3)	15,795	須恵器甕		鉄製紡錘車	図81-1
G	他 遺構	3,420 土師器1	須恵器・土師器片 須恵器蓋	図70-15 (S K1)		
G	検出面	8,455 縄文土器1	弥生土器片 縄文土器片	図65-1	打製石鏃 持ち砥石	図77-1 図78-6
G区	土器合計	62,321				
H	1号住居 (S B 1)	3,272	甕・坏			
H	2号住居 (S B 2)	17,059 土師器5	甕・壺・坏・高杯 須恵器甕	図70-16~20		
H	3号住居 (S B 3)	5,964 弥生土器1	壺 (土師器・S B 4 混じり)	図66-7	土製円板	図82-1・2
H	4号住居 (S B 4)	3,441 土師器1・須恵器1	坏	図75-48, 49		
H	5号住居 (S B 5)	2,015 土師器1	坏	図75-50		
H	他 遺構	4,202	須恵器甕・壺(灰軸)			
H	検出面	15,179	須恵器・土師器片 弥生土器片			
H区	土器合計	51,132				
I	1号住居 (S B 1)	4,616	坏・須恵器甕		凹石状石臼	図79-15
I	2号住居 (S B 2)	2,284				
I	3号住居 (S B 3)	825				
I	4号住居 (S B 4)	11,112 土師器7・須恵器1	坏・甕・瓶	図72-34~41	持ち砥石 鏃	図78-7 図81-2

I	5号住居 (SB5)	803 土師器1	甕	図72-42		
I	他 遺構	919	須惠器甕・坏 弥生土器片			
I	検出面	2,232	甕・土師器・須惠器片 弥生土器片		石製紡錘車	図78-10
I区	土器合計	22,791				
J	1号住居	22,846 土師器8	甕・瓶	図70-21~24 図71-25~28	土製支脚	図82-5
J	2号住居 (SB2)	15,919 土師器5	甕・甕・坏	図71-29~33		
J	3号住居 (SB3)	23,855 弥生土器10	甕・甕・鉢	図66-8,9 図67-10~17	磨製石織	図77-4
J	1号土塚 (SK1)	969 土師器2	坏	図75-53,54		
J	5号土塚 (SK5)	3,126 土師器14	坏	図76-57~70		
J	他 遺構	3,198 弥生土器1	鉢	図67-18		
J	検出面	8,663 土師器2・縄文1	坏 縄文土器片	図65-2 図75-51,52	磨製石織 土製門板	図77-3 図82-3
J区	土器合計	78,576				
Ⅱ-A	他 遺構	470				
Ⅱ-A	検出面	1,945	須惠器甕 弥生土器片		剥片(7.3)	
Ⅱ-A区	土器合計	2,415				
Ⅱ-B	1号住居 (SB1)	1,570 弥生土器1	甕・高杯	図68-19		
Ⅱ-B	2号住居 (SB2)	12,790 弥生土器6	甕・高杯・蓋・鉢	図68-20~25	扁平片刃石斧	図77-5
Ⅱ-B	3号住居 (SB3)	7,925 弥生土器2	高杯・鉢	図68-26,27		
Ⅱ-B	検出面	7,285	弥生土器片 (土師器片)			
Ⅱ-B	他 遺構	1,050	弥生土器片 (土師器片)			
Ⅱ-B区	土器合計	30,620				
Ⅱ-C	1号住居 (SB1)	190	弥生土器片			
Ⅱ-C	他 遺構	725	弥生土器片 土師器片			
Ⅱ-C	検出面	1,720	弥生土器片 土師器・須惠器片			
Ⅱ-C区	土器合計	2,635				

第VI章 結 語

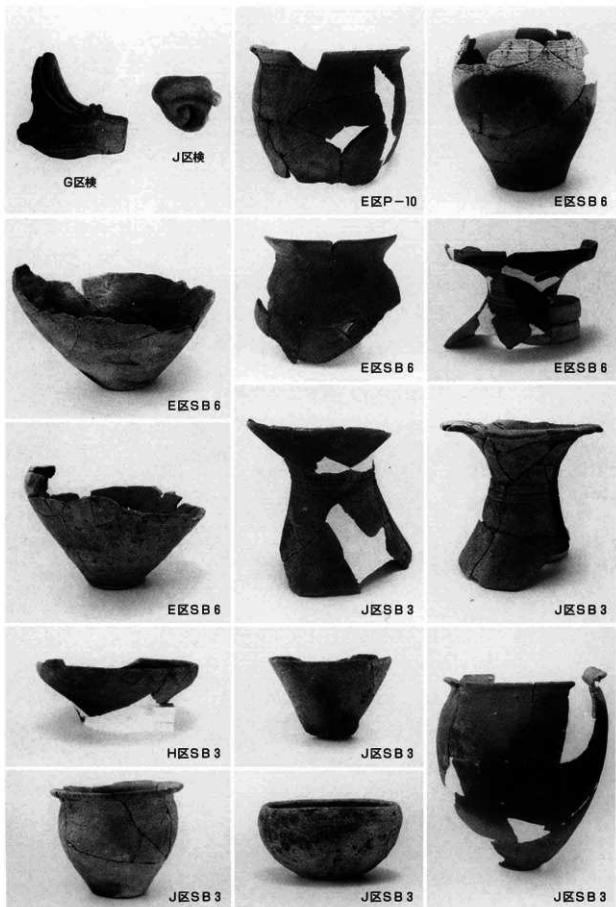
今回の発掘調査においては、弥生（中・後期）、古墳（後期）、奈良・平安の各時代の遺構を確認した。遺構は住居址を主体とし、集落域としての性格がみられる。

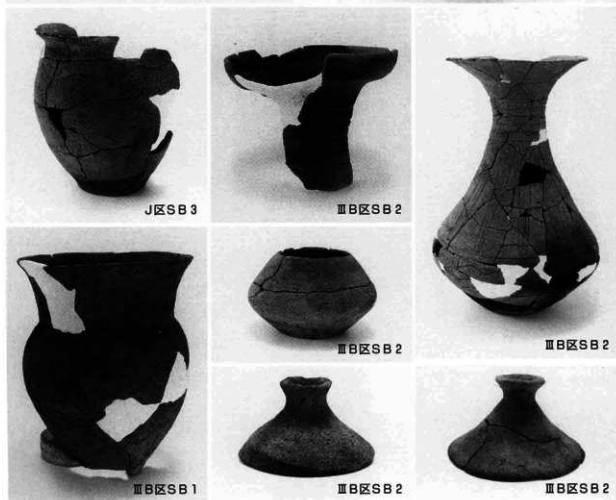
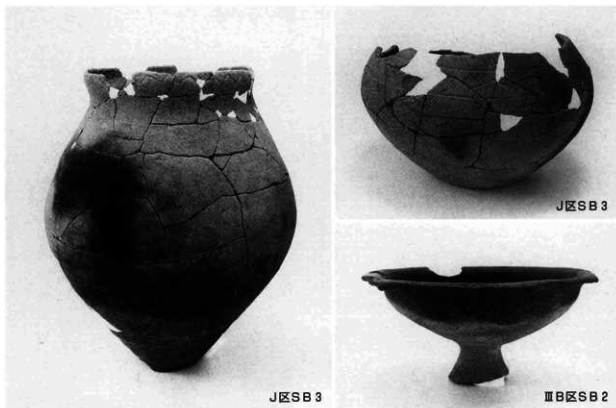
住居址は弥生時代が7軒、古墳時代が10軒、奈良・平安時代が28軒の計45軒であった。検出状況では、各時代を問わず重複または切り合っているものが多く、住居が密に存在していたことが見て取れる。なお、本調査では、道路拡張部分を現状道路に沿った細長い調査区の設定であったため、調査面積はさほど広くはないが、各調査区間での範囲をみると、南北が約83m、北西で約155mとなる。このことから調査範囲を中心として広範囲に渡り住居が密に存在していたことが想定される。本遺跡は、弥生時代後期後に集落は一端途絶え、古墳時代後期になって再び集落が展開され、以後は平安時代まで続いていく。時間的にも規模的にも大きい遺跡であるが、遺跡自体は集落が途絶えた時期などを含め、周辺の遺跡と共に当地での集落の展開と併せて考察していくことが今後の課題となるであろう。

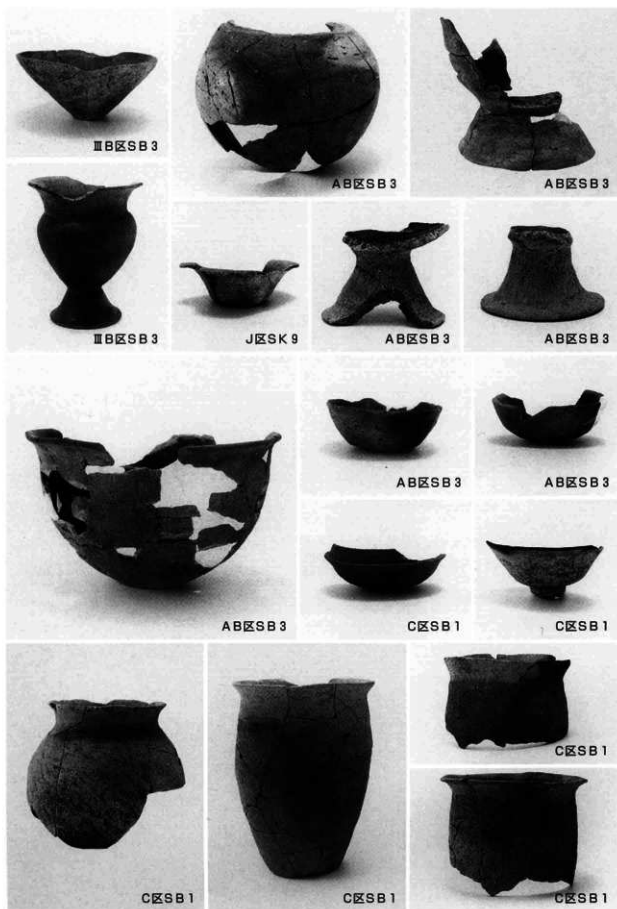
弥生時代住居址は、中期が3軒・後期3軒・時期不明1軒である。全体的に遺構からの土器の量は多いといえるが、特に中期で、床面から形の残る土器が多くみられた（内1軒は平安の住居と重複する為判断はできない）。住居の廃棄に伴うものと考えられ、このような行為が当該期において普遍的に行われていたことが考えられる。また、この時期の住居址は調査区内で離れた位置にあるが、古墳・平安時代の住居床面などからも弥生土器片がみられることから、当該期の住居は検出された数よりも多く存在していたことは確実といえよう。

古墳時代後期、奈良・平安時代の住居址は多く存在しているが、調査区の制約もあり、一部のみの検出となったものが多く、全体の様子が見えるものは僅かな軒数であった。この中で、21軒についてカマドの検出があった。時期は古墳時代が9基、奈良・平安時代が12基である。カマドと共に住居廃棄とカマドの破壊行為の様子が考えられるものである。まず、住居の重複による影響と大半が調査区外となる為、廃棄時の様子がみられないものが2基ある他は良好な検出であった古墳時代のものについて見ると、検出の状態では、カマド内に支脚・土器があり使用時の状態をそのまま残すもの。支脚などは動かされるが、袖部を残しカマドの全面に集中して土器や石材が置かれるものに二分できる。前者ではこの他に住居の中央に石材（土器）が複数置かれるが、後者ではカマド周辺以外には何も無い状態となっている。奈良・平安時代のものは、支脚石を残すものが一例あるが、多くのカマドは当時の状態を残してはいない。住居の廃棄にはカマドの破壊行為を伴っていたことが分かる。カマドの破壊行為には、焼土・硬化面のみを残すものと、袖部分を一部残し、中に石臼や上面に土器を置くもの、さらには一度カマドを破壊した上でカマドの上面のみに土器や石材を置くものに分けられる。焼土・硬化面のみを残すものが一番多く、次いでカマドの一部を残すものとなる。

以上が検出されたカマドの概要である。一遺跡からの数としては決して多いとは言えないが、この中で本遺跡での住居の廃棄とカマドの破壊行為について述べる。まずは古墳時代の使用時のまま壊さずに全て残し、住居の床面に石材が置かれる住居全体に対しての廃棄行為がある段階。次はカマドの破壊がみられ、さらにカマドの上に石材や土器が置かれるカマドのみを対象とした住居廃棄が行われる段階があり、以後はこのカマドのみのものが中心となっていく。まずはカマド全体を破壊した上で土器を置く段階があり、その後はだんだんとカマドの破壊行為が簡素化していったものと考えられる。古墳時代の一時を除き、住居廃棄＝カマドの破壊行為となっている様子がみられ、カマドが住居の中心として考えられていたことが推測される。

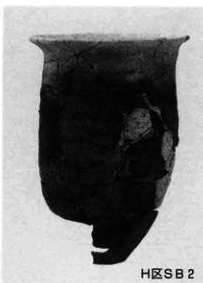








C区SB5



H区SB2



H区SB2



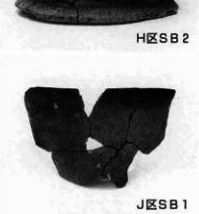
H区SB2



H区SB2



J区SB1



J区SB1



H区SB2



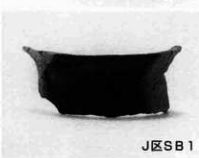
J区SB1



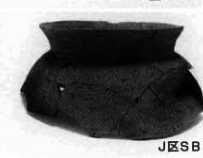
J区SB1



J区SB1



J区SB1



J区SB2



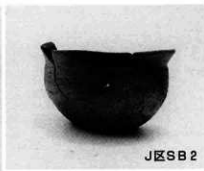
J区SB2



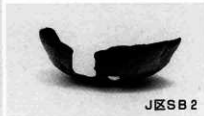
J区SB 1



J区SB 1



J区SB 2



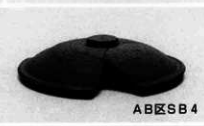
J区SB 2



AB区SB 1



AB区SB 3



AB区SB 4



AB区SB 5



AB区SB 1



AB区SB 2



AB区SB 5



AB区SK 3



AB区SK 3



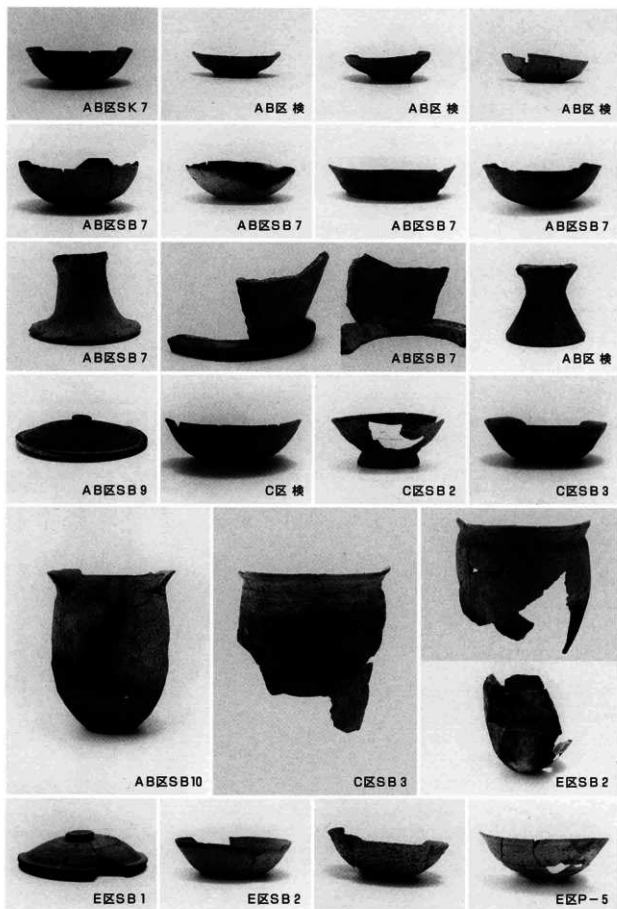
AB区SK 4

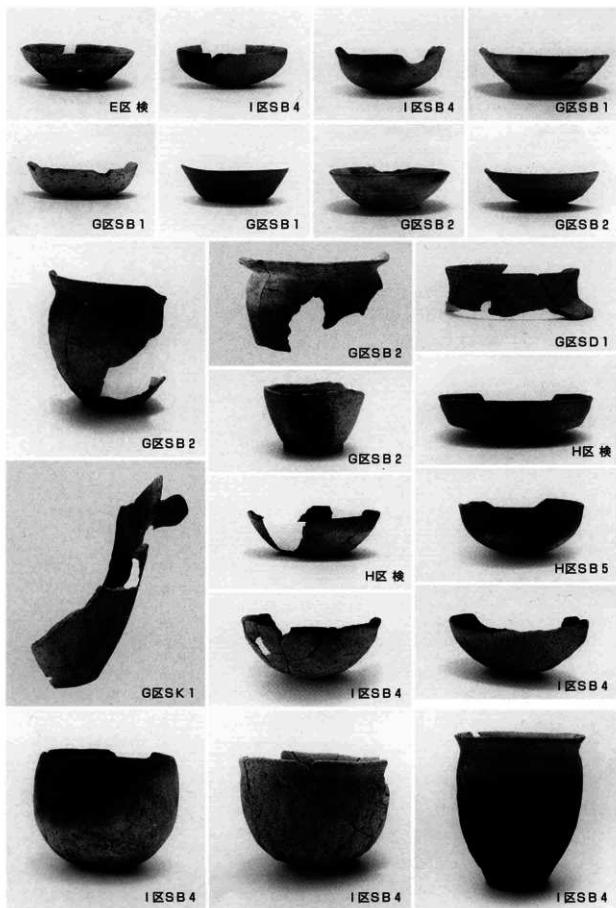


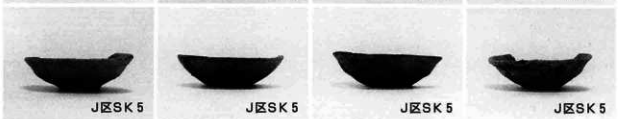
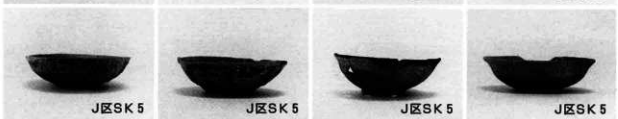
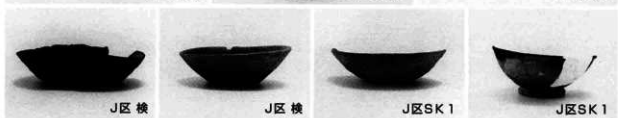
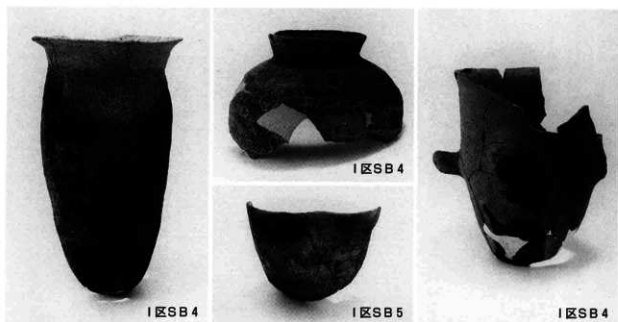
AB区SD 2

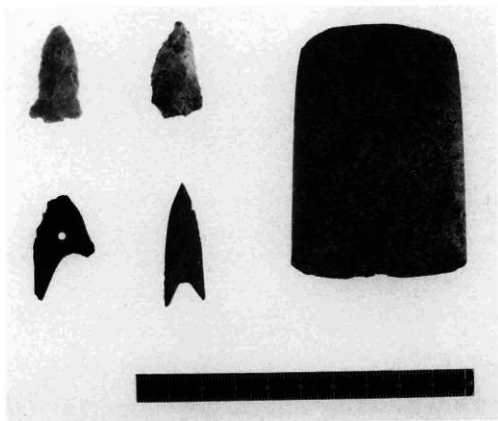


AB区SB 2

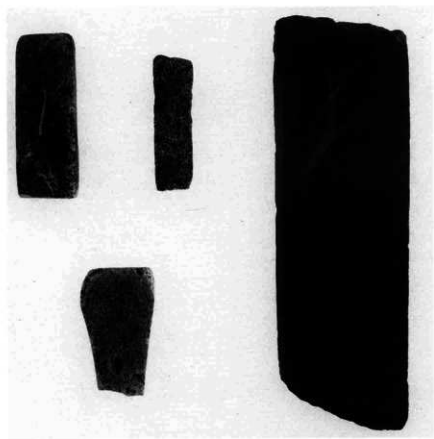




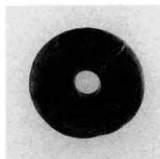




磨製・打製石鏃、扁平片刃石斧



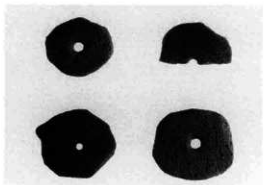
砥石



石製紡錘車



円石状石臼



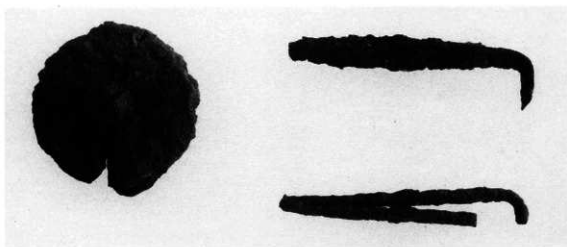
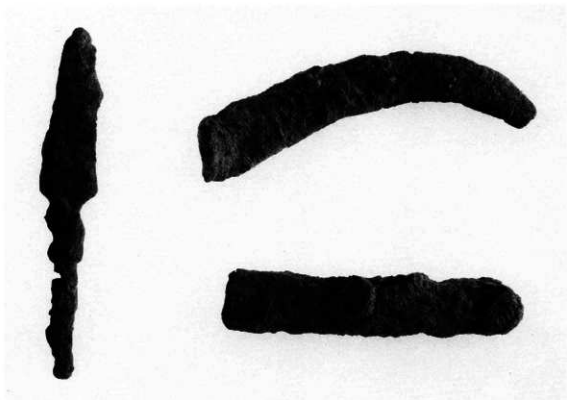
土製円板



土製支脚



銅銭 (S=約1:1)



鉄器



鉄滓